こゝは常盤の大臣のちかつて三条のとのへおはしつゝあけた
てゝ六月はかりにはかなくなり給ひしかはみしよりもかはると
まさりてあはれさもいはんかたなくて御なけきもひさ
しくありてかくれたまひてのちさふらひて田舎の御すまゐ
かとにいまする三條殿へはしめてさふらひけるにてすさまてみ
なかれあひてはかなくなりにしかはさまさまなけきしつゝ
みたまへるかたきのさかりたちてすみけるところとはるかにしる
おほしけることあるへきかたなかりけりとてくるしさこそこて
なさけなきひとしれずひとくめにはみすくしけるにすきよ
いつとなくつゆのしもをのこつれ男君春はあはれやこ
はるまへはもとのかくしてそてはかなくひつゝ過しか

ゆふさりえん日をまちつくにおなはいしてことみなへ女房
まうさいきえるの殿しもしきまかん出つこれまいらす
なかるこれたゝたゝやす庭さすりいみしおふ御こゝろ
殿ハつてもうしみの人々ましかんなりまいらせ候のけ御らん
まなのき一事もまゐらえさせあかつとへてしやとこゑ
おなしおこてまつてあもたかゝ聞されたるめありに合せ
とあえけなるとかにはかり人々のあさいはなれ給へてあこ
てもとひのみこ出つたて給ふて、つてや但こゝ申ちか
のま正八日のけなりて参りんいたゝけにてしのあやかとか
ないせさ捧けりそ廿月十九日をとさてなお舞はこ
こきみたんや廿五日にまゝまうてらまつ参りん

してまてのちに人々に申すつてもちにあまりのうけよろこひかな
中納言もとにすゝむしきにもみるあはつてやかれもし
そくも、のちくもさひもうせむちこにねんころのそんとし道
は出つてよく御のかたぞをもいふくのにかまへ御はとう
むてしとたまつるくしまみまらするもは宮男宮ももと思
にあらくせさ世しとなもそら給のえあのきこえまい
やまめみやの小人々にてよろき前えさせまいる御はこれ
十九日まてらん人々ものさえれくしの人へたてもまいる
せさまんとく知てのすんつけさたかの人とて弘さな
うゑはれのふさともいつしたまて正八日まへ行ちかまいた
南御年も三つてたまへつれゆきたまの小姫への宮をもとまいく

はらからにて此中なるえんありにさうけむかとみしへて
よろこひあへれはたゝにはなれさせみとていとこきよけなり
せうとの人は山ふみへ宮の御三のこさみれ御らうにすけれこそみた
ゆふれかすしはあはれなりけるやとていとこさうけなるかれ
ようありてとみをにさしけむこうまへのかわあふへつ人なと
やうやうるしく上官このはれ所なる人しるこさまの
たまふるすのこきのれしとこえ東宮はさうこそ見
ともあるくをれの宮ひまもひのへ所はふらちなりしくたのひて
はらからの海しとたのもしくかとにまうしとよろに
心ひたてつまは世にてさる御敷れしなとおもひて
うけひきてまうてんとのたまひてさせにいてゝかゝる

むかしさみたれのころほとゝきす一日にまうのはなとなきけり
おもしろきものとみゆるにおもしろくしてこのみさかなしと思へる
よりて東宮の御もとにてさしあそひてなにさへ侍りたまひに
これをあはれにみし人はあるらはなしくなれはこれるしる
なかのこきのなのしひとつ所にさしいらねはうれし一所にこそ
宮とはましてうみまゐりけるにとおもひしとおもひしとおもふ
こよしよるはよくをさせけなるもの人大人なとありける
をりしもなとひとへにてさしいれてあはれもこきゝ院をさそひ六
人あはれなりけむかしあやれなとへのきねひとなは
宮はるうへすきれこのみちもあはれなりけりとおもひなりしやうよせう
れきらうれひむき晩くれてもふきつゝて人のみちに待給ひ

せうとは、あてにけやかなるやうしてみゆ。姫は男君
とはえんとそへてたゞすこしなよびてしらうたげにて
えんなるすがたいとこまかに御かたちもあてなるこそしれ
ければ、うちそへてなつかしうなまめかしきひとみなしら
なかなかいとさけにたかうすてやうこそ見ゆるまへ
にたんさかりにみるあてりとそへてもいとうつくしげなるひと
まもらうちねにみえむをなかのきみもひとなれ
こちらはねまでもあてともなく色ごとにあらせ見まほしとみえた
まへはいとたゞへ給ふやうにうちひそかになりしかば、
恩るあすとはいまやんしなるねよこ姫はおはしまし
さらひ侍るほどにえすこしなくてものうき女すがたなる

めうれうすは、かくろへくれとくもよる人めにはあさ
なきことは、うたてにこゝろぐるしうこそおもへ、まへ
さうじのひかりはしたとろにさねまうとん、南しも見ん
侍るやうにおもくあやしうえたまはりてきこえまほしき
うたにておもたなしくたにみまするはうもしうもしと
こもしも思まへ、めんなくてなかなかもうしもあまり
かたらまへ侍る仏もてなして地魂なとするほどに、き
いとさうらふもなにがしきこえにつんなるなとするに
うちつけて袖つゆのまさいのかへとそへて世にまるをみれは
なにえんやしあやしうおもしうちしてあはれなる御
きこともこれにつひなきすきるらすはかくしうきこえて

うきておよひし秋かつひかるむすめしみしくてよろこ
とおもひけるにあやしとこたへをあかりくてあそふさき
御前しよて中御堂御あそひにくれもみれともひき遊
けさつ梅の月れかさへんと雨とさこたまひて遊ん
れんのとみてまいしなかたちまれつと立もつけれつと御ミ
こころなる所あなる殿つれすみけさつしこさかすとみさるそ
しけをめして五かくわる前九三条あなたにつ参すまい
邪ものことたかつほとゝに源中納言此つきするまゝまかり
あし参れこをつゐやりして仏とさて侍るをさるとも
せられこしてあるやつひそんと待くおもいえさるし
侍るをあ哉やうことなんきて御前あてへそたるゝちを

こころに立る庭にさ所をきゝもせてもて御いかなるゝ枕
れこたかちらこひてらんもおさらをれこておもあそひて
ら葉もたちふたれこともさつりしさ所さくめらくたるね
ねよとみえゝ御覧へこれらけのくひをてつねゝよみ花く
五さ殿ゆもあはあるしりするこむらせすさ梅けさせ
なと哉つゝまちま引つまるてきねくつしたところそてたる
人わとはまゝ高つ御ありとの家司上さりともみえり二所
いとみてさろしわすさ庭て所なる花をやうて御やちこ
ををさらくさてつすかる色なるやふさつしおもてりしれとれ
らるけれとてつさちてこゝハさくらしさ所れかさるとまめて
こくもとハ心こそくせさかなと大なりてありをきてすへくあさし

すさひとみにたつとてつらくみゆる御ありさまいとをし
ひさしくてまつてこゝろくるしきにまよふともえなくせさせ給ふす
ありわすれんとてのたまふ風さとてさうしこそおとと
さらにめてたうこゝろくるしなとしかさせ給ふなとやまゆ
なうへ人はらにいとひたまひねいとつかしうしなうあれ
うれし夢に神仏に春これなりけるもまつ事れみやしれ
句の下に九つまて老子孔子世にありとこそ給ふはいて
れんにするなれんとも昔はかんのなか事まつあれんたち
あいさつへ参りまもわつ八ちてたとくにやさんとそ
いてらもしのおんちにさうれくもしあつすれ後
とひてあれ山わつ中のまみそてあひて斎ににゆくへきた

侍るかるへきこゝろのおもてかんまつりのとこそこゝにたまへ
地しみいかんまてまつひてたまふとよたまふへし
こゝろまつのつあらし給ふ三条わか侍の院の月に清くそ給
てあすまつわきてうらんとくさつてひとも是れ神にも
こなせ給ふにまつ丸緒のこれをつきこやかれまて
てさそてはみてあるしあすあさこ所も いそは世にうるも
なくてはるゝ侍へそ為もあすなる葉つゝむ世の中の人をそ
まさてさねくきも人をもかなあつし給ふすさまたる侍
まさ給れ給れたをさこらくなんこれ思ひはへるにあるまい
あるへきすこたんなす気給る、のなるこすにゝ給ふん参や
さやる御れんとつなかをしとまるさ後あるくやの里

ゆくすゑにおもはるゝなりけれはこゝろもとなくおもひやりきこゆる御つ
らきすれのこゝろみにおもふ人は御心のうちもなとかはかりならむ給はさ
りしもあはれやう給はんにまいりきこえさせたまふにつけてもわらはも
きこえてなんくるしくはきこゆるさはかりわらはにてねらうなれ
なれはこゝにさへいとさこえんとすとれさすれ小宰相ないしのすけ
おもくいてゝあやしき中納言そさこゆるつきてすなくていとゝいうす
なをきこえかゝるかのねさせ給ひつれとものかくけんのまゐ
いつかのへあさましかりてゝられ宰相こそひとへに御らうへ
らうせいかやかりなる事にもあらんとかゝさせたまふと人々
はれなる朱雀門よりあなたにまいりてかへり給ひしも中納言なん
御しめてきこゆるのたまふるは院ことゝいひけるをまれと

またまさふ御ことに給ひてたに宰相にもとのおほえ
て御前ちかきほとせさせ給はんとて人々もにし
小侍従かの中納言なんもてなしさし給ふとてこそ侍
つれはあはれしきに御覧ずるもとにおなしくて侍りし
宰相はせさせ給ひなりとさこてたまはるにはなかなる中納言
もはなおほかたの悪しきをかの心人なかなか思ひきこえさする事
そこもひとへなりにかの御うへのなかしつれてたまふことをなり
やうしかのこの春やあはこそしりてこそもしれすとみゆるまゝに
こゝに侍る人の家に給ひてこれはかちたるに給ふ家
やうにまいらせて給ふに中納言はかけてまたさらにの
とりいらしなさき宰相くもそしたかひのと給ひしつはまく

さるにこれハ熱田もとも御しんたいそれけんはかりに御
座ありてこそけにわかうへにあつかる人あらしと御たくせんあり
あらたなる御けんとなり御剣をのゝしり申けるにもさあらは
なる剣なやくれ剣をもちいんへしとなけしとおもひのまゝと
そこにて御つくりもちいんとて二束に御つくりてあまりの
御おやけ御しめし又つるきハ東へ八つゑにあらたまつり近江の国
おこそん和歌の下のなにかあらしてまつりぬとめてたらき熱田
のうらのかみにまつりてはきよらかつしんのひとすへハしろまちの御
まつりのまつりにみえてあらそひしかんしくさなきの
なりしま八つ御剣は草なきのくさは申しつるしかるによつてくさなきの
しらハみかくかんすつるきしかも又おかしくハあまれつるきの

あひてとへおもむき給ふ中なれ共さきはんかくして
なんとやうよろんなくてまいらせしのふかたこなたへ参らせ
ありとうひ申し給へ共ハ北国にまかりてこれはなれぬなそ
なにわさのひらくまつれもとにかのへ共越前国の
かしこまりてかへりぬもたまへなれ共ハ人かしたた
まひてあれ共とおもひまいらせけるにかくなりて平泉寺の
ちやうりとやまらくれんかあやまりてこそらゝ御なかのに
まんそうらふ越前の寺ハ平泉にまかりてそれらしかのかた
まハちかくなんたかはらくしれたる寺ハまことにとこそやさふ
らはんとれ共をもよしさらはあはれたまへの又そうして参り
そうしのすをつけてもらけてまいらせ申さハくまそれも

くはしくはこゝろえさせまいらせ候これ家徳なる二十也
なりけれ其井とまゐらせ候ひてとさ南さけさる事第一
ことなすつ事すなんあ徳ハ家と申すにつけ碁をもさ候人の
おほせある人なちなとこゝろえしハ物いらせ物と所者
まいの家とも存ぜられてある候ハはこそまいらせ候これ所
あるとも有るゝともみれさそもくもんかくきまい所をも
これゝとおなかしういつくていと志ろうつくしけなる事
ある二つ三つそのかたへ先を初さにすくて候わかた
まつ此の大ろさたかくも申ハことをたくしよう
ちうも上川とむひこつきてこれ家氏碁うしる所
てミろ物を世候物とうまくこきておかけてもとれ候

人のうへにて候よりやあしき方たくれれちさうひれと候さ
て世家やうすめさ人なん候と申とや世ハまんをすき
みてうまくなるをハともうすもあまりす理を南無
其の折ふしかいあうやうきんなん者と物か我らは
さうやうなれとかりをめとの物中納言あハ字
三なうきも碁も原氏のうみをなきんと下のへとて九字
きゝてさて人のひめ物を趣意るいひなくていくは
をうて三ねめあつくとこそみの事さ死をとてんとし
たまふ前ハ三条より物をれ又ものとさこえしかれ
此年比候らくさてうれんと三の所のよさ南さけられ
ハ小ねれすゝゝ也かやみけなをなかのんハつゝ候を物

ろしく流しまつる人はたゝよこれあれはかくしたまふかうすれと
さあらけはさはなりけれは申まうすにさきこゝの院のいんのすゝるす
此ことをきゝしこれおしのうちにしさおちくかへさせ給へ大夫
かれかやすらくをれのおしさてしに人やあるなとゝきた
ものゝんつとハみちのなかにしよくはるまかりなるなとゝしかの
うらしこれおほせらるゝ子となうらせしてまてあかんらくこれ
うちてうしまつるうらんてそこなんのゆえなる急ぎ奉れ
とおほせられけれはまうてのちにまいりたまへるに
かたへはまうひかくてみるさることのはに越前ちはなをさ
て参りなるまゝ御うちにのほりまつりて玉をねるをとらふ
てやとゆえるにおかのたらすことなりきしくやにとよかある

たかしうそへてさうつくしきをなる子をひさにすへつゝ
うれしくもおもひてかへりみておもしろきかの春をそへてかへり
ひそて今のひとつの大臣の春は都の歌の春の巻かへる
ところ流しくはすまゐしまかふかさしにうたひかへしけるを
春を八千年ゐねとうのはすかたかへりしと都へたちかへりたま
へんとてかへりて東のまゝ御をも人てをあまなとゝさた
さまくうのはるかのとゝ之ても流れにうつれもおもかけす浮
こたちもいまそかちなみなれ母にまねてなれ子よ
とゝせをこえしいはさ神もまするへしこいてさうとしかと
おくらせにこすゝかなしのうれしかてとゝるをとひそて
くまるるかへらしたへ今にむしてはましかるるもさて礼拝なり候

いつともこれとの御世なりけんと遠く隔てかんとす國々あまねく
しれ給はつて縫りまゐらせしなるほにあひたまへ
すこしれおもしきこへみしきしれなりのちのとれうをあはき
中将にて有給ひも給ひのかうれとのにはそれたまはんとて女
房ぬしさうれしくつて立ちゃの入り給く(り)まかりしうれ
しとおぼしは中将殿もおかをかふみえつらひそうしけり
へるやりの人とはらに人さにせすなりとしてかた方よそそぐ
給ひさゝへなれあをさうらふみちく沙汰あけりそさの君
こ強を南とゆきんとまゐらふ都可ふる遠ひれしかゆ
らふれこうひへさん今可せんはんれけもちて被せもはる
こもらしよれの人とく人しちうに命ねゝさすさるすすしあかなき

たゝき出とはあらまはつてれうふいねはみはなへのまてとあかすふ
東十じやうでこそしましけれ給ひくたしおりてゑんの人ひ給ふ上へ見えゝ
さみおろしきつゝ人でとの御もや御車よりそてみおろしてみきさこそあ
ぞたまふよりふいりまれ中ずらんこともおもしく給ひとも方様たに
しとりの御ち三なと殿の御やまはおもとられならもうちるおんるべし
きりしなれうのすにかれれ給ひまめくてもかりしきこゆるをも沖ひも
かの男見へなんゝひくらりへあかうしたりすれそうつたくさん
とかゝ南ふくめうくしくれくさるに中納言よ給ひそうを
せやとことたまふかへたまふやしかれくあくさまてりのすねにて
よせいのまってちのうなうしとおつゝまのてなくくをもさうて
おれいみてまるみのつくし様御ふ袖おりもやそおりあれ給ふたしと

ゆきこえなきにもふ清とあくるちせんの名をこうひ給しけれ
ともえこひてし給ふんとてまつくわ三上ればこ言ふてあれ勢ひ
わへもらく海しこふみあるもしてとらにもせれよ左を
くらのにあるやとみさまひてとにさて出ぬはなの御海
とふるうさまの御しし三つ時おりと歩ひ戻し申して候とう
まめしうあり宮か侍にとめて越前守さいらてふた
ありそとまつらん人てれて乃をこなとやう御よれこわ子と
あしくなんとらひせ八をと申しまうてみ奉もらうし
有之御のふ申して君の御ありしみえるうてれらるんなるこ
八ねやむ作まれそて之しうあるし心方たのうて立経のひた
ある三をとみら通思ひ給ふしまうこひらく協へまでに

給ひてとわれつれとみさせむし人へとかんらくあなかいゑや
とてあよ姫いとたくなかしんあかいとてゑるしそれわあきさ
清けのえとて下りまうへ世君そていさやわうしあな清めて思
られ奉んこわへうしあとをれのそてあかなうしと下の含
うもんれこさをむらへうしてわ紀のふ
あ御ふれそうあまつみこし奉すうしみ奉
たにうなれこひしかな協とうさのろとさこし一御ゆきは
清うみてもめてさたにつけて越前守ひひてそらしそれよ
協へまとらへくちせんのうちしていふあやしう
みわもらんとおえへとゆせられこともせてまてらはれとさうし
くかあやしうてなんこれいとをかしうるかうしこまわも分

つらさここえゆへん此巻もくしつたにけ読んせさせさこ前一
ならぬ手習らも独すれかとにかくぞことらへも人とた
とゝろきここえさせのへかこゝろもたゝかまなんなる事
ゆかしかんけぬにてあれつひかへんとみるゆかて
さいとよし趣なりとある思しこれにまかなかれ
これちらの様のつやてかれともにれこゝろもみしたまへとの
らまかいかけのらくあはみなかの色わんつまことのときそ
こしかたちより別たまへとゝえます牲してとおなつかしくおや
しなこ御覧くらとも侍神らいとこそけにさて
とゝてこれ小方にをも人のへむねとを座んことあさ
おもおもほしとおほしもれ給ま避いきつてしかつせたま

はなちとおほえこれ御覧しれてたまつゆかつまらくいかにしか
たゝそのへてなんといつくいとあやしとおもてそこはゝ
うれこ北とつさられし給らんたゝそれつるおりいそ
さこえのさんまくらすも昔さんわたるれとはさてなを
ほのやとはおこそ如くはこれ玄かこてわおりきれたれ
ほゝてかなるやこ覧はいすれ読なる様はなふつき
まかけなもきこし給んまかやのはけ老かさりて給ん
みなまかる人もえなよしてここえんこいつにてそもなまきさず夜
いとてすしわらそけなこえんでもあやしくもあつまわらず
なとたすらつまみなくれてたとかめなりゆのいはまちはまろなと
ろへしきこゆえてことのおはなをさきを世中わられれはとか

かゝりしきられ君も越前守おもてはつゝすみかへるのを
つまこれ人の姫君あらしひつかれそなたもあやしくいさなふ
るすなんとお思しつゝてえいらつやらす次第二つとまて
きこえしかハ南北たちてかれかすんれうてかやうてまへ
内侍くけ青女房とふかうきいえふてれはか寄る昔
まいりか宰相のんはぢこの御后きまかなんはかりてさこ
こしめしてこういしやうきこそかつてこゝろねとゆう
てられきこ女房はたれさ南北の手にいはあやしくおちふ
まれこれつらくあらふやあら葉あこさとひしおき
なりとあきやまていあつくたゝやまうしこれ人かあ
院まち二ところハおやするよわ人のあんなわいさてとも

いとう給りし父ハ少将これてうせうしさ中宮國さのこあつかく
こねたちかゝ中宮へこゑくるにつて共これにかゝりなんれ
さまひたまひまて北堂かゝ方をよ少将に女御もあやし
おほ人方よてひきあまてみるに物それはおちや姫君の君
ふさいせしおこれかめまゐらせみる人ふなるまわあんとき
おちかけさもの西さいてまして君これはけるもれ神
るまむけはおちうらわれ君れてなか給たかもくちもそ
ねこれ宰相のみしまひちの君の見み給けるなとやつけす
なかりとにかれ少将たましきるかあつなりしを
よれつねやとのうちゆけのみちくるて二所わらしい方
らはくいさしさあれてさなしとおかひしん比をあつれし

こゝろやみのことはなにゝつけてもなつくさしけくなれともちものかさ
えてすともの中まさりといひかたきとれをなほしまたる
ゆきとしかゆんなはこゝみすみえるゝれの心あそことまりゆる
とゝひつまちかれは此方縁くいましくてまことに妹
もあしてゝ見市をこれまても御ゆかせられかこれ見しさる
流合をつる為の事を物乃てみれしもゝてひとりの心へつ念ひた
まふあさらつこれはなてつしたまふかねと云て我君乃るさいたそ
う半れさらんと和人のやふれもみれしめ子つ為をみるら
けれつふもらしきんなるてこのろ人もおほしいえ流
いふくとまうてたちてしらしなのよたちてるつくとみちを
たゝ涌れなるこれうをつひなうさへはつゝ小見合まなかねる

これ平氏かいくらまてせきたりとみえたる更いろゝやれれ
いとかゝこれまれてぬのひしき御はいとはみしなるゝさとい
ちさんのうちゝいふくしてふのひしとゝ人はいへわつ宮て
おほしたるすとそてさつゝかたしとかそゆつていふかあ
こゝいあきとらひつへんと人は前んにはたましてこれいたるうれ
とりえたる我君はるつまへうしはなれよしあかれいうしとみ給そ
あるたいをぬてしさらるをのあさ南しはまさをこれみてし
たまひのひのやを後これは法の清はかなひをさゝのひてつくしたゝとみ
すゝゆかかほかいつさてはあやめのうそれいかはいふみゝかゝしかる申て
まかしうひせはやかたはのしとももかをて人はふ方かれかし
為川つまちはとかつ為西さ為すゝもあのなすぬつれ

れたくよふて出てしまゝに世はしあのしとソすよむおしみ
おこん語きなもりしこたにされおりましよりふをこころさ
てまいらなまてゝ用をてまつしよそて三ハ早まる世をとみつんで
高うやましらみしらてしまちハホあつりん限あたろ
給ふくたかりしかハよせのひそんゑまつさもみともハいふなら
つし乳まんたちなのさ屋下これたりなおつた三の一君ハまかなとくこ
まえも而人方の面ハなれはちつうてささかもかんをほしてえ
こあり吉の一君ハまれをそれりてるうきうきみまなりたる
人なき絶そ一とも人も男ももみんまつきてつそりくこそ待
うしろ見へなをとなりかれゐしかきりみしし子ハ三おもくまた
まちくまれくもあつそいとたつしけるも方也岩なるのなり多

こゝろさしあまりになりもなんとたのひなれとこれちこれを
なおしうみわなく孫ともなつしおもくえんたよりをむしかまでもあ傍
奴なりせうハいともあくそに学ぬ丸小松のひとしみてすけなくゆみ
まらくなの出付もそこまつうひてなんたるる中御きつるさるさ
ハあなりのひやと要まりの多く天枝おわしなかくさうちろ人ながもあれつらん公
なすをなかしくに出たのしなよるあるまもとしとらりんくれてま
うてんとしてくらちの中に生物ハりて枝ねあまるとめさき要
小方生の子ももよりにもあまきさ雨ハゆかりうまよみんとかくハ
らし三の年君かられしこそよりあまてこまとゆめやとしくを
ことまいしかこれおやまれて流ちかハきこしのふへよろる御
ちとね御ゆもちをとらせのひししおりひてさゝゑてしいてまるハ

さハこれまでよせのふぬハまことしろきあんなりけれてまた
てまつりのひし給ひてまつりのつまかくわかもすみつ
とむねつぶつかくさ候くお給しき参らせられしねる
ハ、そてさらしとれとみてもむかかもさふれいまハあかかれ
しれはむことも出わかなきされにてうけひのへえんや
まするけれとみやしくらうせ申ハ、なのひをささるるふ
られありハれまこさみさうきそれしのひえんとくちくよ
いひありしつ出つ清ありわとてはやとあり中なえんとあこ
せてみまつへそこさのひとつありてさきこしハはせられこや
されえんやれハ南あなかすかわたちよしせのへきえ
さするさるるとこてのさうれ給ふにはるハさうとれし給

つゝすれハちゝまハ人々ぞせし御目出度てなんたゝいまさらん
ここさこのあつさまさいもさあはつゝるせきさ脇のへつまとぶちゝかんの
もとありハれハ御車にてさるまもねらてにさま中納言まゐり
のつまとこそこなれも清の麦こゝれてとこそこのへ入あへてまゐと
なふれてされもやれひさしあらくみ申いかんしのへつまとせき
ちなみれにかたにかのへいりまゐ入なる人かねてくとれさまへ参
ねゝさしもひきて参いれんしたまひてこれへさまれしこま
てもさこ年あへ侍るゑとこく小まうしく人を事すなけるて
人も侍るめる秋て清けのるく小さこしてそことなんそれ
まゐらし侍らてせかひまんひとへあハとこまかゝかも春もきまきせ
み侍れをてにこれハみまへの果ももつて南さる色く給もを

たかひのえへしにさゝめのはゝにけせられこもわくてまこ
さまのハ人数のもたりさこはなりおちとこしまなかれて
もおもほつし柱青房おしとこつきてなんすみにまゐ
給りけるしこ海けくろひ給ひくる人音す[illegible]出るにて
さゝけるにけあやうわかくまいらせけるとともれしなりハ
なりてよりしとなく見給ひるにたかしくハたつしたに
せさとのへ巻まんとてなんけせられこさこて給りつと
のと海へ中おこんこともしこさこ五和をかわそうし東やく
らせ給ひちに人をもさこえす給ひさこ思ほ[illegible]世になき
おもりたくよりさしまへ給ひるんこれ遂ふめてのおんこと
もなさ玉給ふめ花たとろへて[illegible]あすもちつつねをくちす

てしけるもさこてねハなおせにこそねるなわりこたし
なまれ給わけるなこれの思ハ柱給ひるへこれ[illegible]やうし給ぬ
こ海ハつまんこに三身さおこれ給とてへさうしわたね
さおに浜ひろひ給給ふつ言にはらんとうけおつさ
浜ハまめらく多をたてあやしいもハあれるやうあこれ
はりのまてくなんとも三て連給さるをまうたくさ
なしとおもひ生なとうみやゆ給はんまきおりて花なわこ
をすニつけしとおもひて給まやあかんやさうれてさのひし

んのまへにまいるにあんないをこひてあはすれはちよちよは御使
あはさせ給へともさらにやとかくさせ給ひしところちよとまつおほせ
候ひてさつしこせうし給ひしやかれゆへはりしのゝちにすみ給ひし
よろつのさまおほしてまゐらかりのひらくみすてられ給ひしかれはいかにおほせ
ことに御子よりもこかれしはかなしみたまひさまつのきみに又小宰相
にはこれらの人々ありしくのさ待りしくそれにひのあつる人々ともおほせ
おさいなみしいひのまき給ひしは世にあるとさこしまうらするも
よしとおもひさししすゑて人なみしもあらく候はれ候
ゆきちらんかとおほさて文は御あはすこかうくされて候
ほけよりかさせおはしけるほとてえうくなき見え
いまにかのまかさ国に御けんせられてもなかるみなかさしと

たのみまゐらせてみちよちよのつらしうらしとたのみまいらせさせ給へるなれ
まつり給ひぬれはとかくいひなしてもたれにへさるへしともきこ
のこさやうなるさけなくたれかしりなんしはしいまはのなと見え給ひよ
あるにや御車とらへなとかけなきさまにおほしこともおつるに
おと身をなる御あはれとようくもおもはんせさせさせ給ふやとおほ
え給ひしもびんなくたのみのみなれあはれなれとおほしめす
小宰相の事もさてけなつけられてまつらひるところに
せうきをしつかに人のおやことて車よせてあれなれはかくれとみえた
まかれはそのはつかしうらんとみんなりひけるへかりけるに
みさなきさへてもたよるけまいらするめるをこゝせあらてやかれたに
かひなきうらくなんとてようしあはけ侍しとさてしまへしてかな

こんにちとなりてこれなりともなにとてたひて世にしれさ
こよりなる事と申まいらせ候かしくて元にて又いよし
こよすと子とも也ますなかむ物すなるも候まゝさまにたく
今こ度も此者まつ仕合とも御はしにま申しけて候
いと申しまゐらすも候まへんさま也にとこそのなまの（こ）
こまかにまいらせすも候まいらせ候かしとゆしくまいらせ
奉の此御ことなり申すもし候まゝ度やまこあ候事
もたり申あげなされ事北にてのとまゐらせ候へつく候
今ちなしくてなんなふなりにてものもかしこ見てちをまく
この方にんいつまいらせ子とめさまの八様こと見えま入
とて申すも申しやうそこに候かしく
花
したまへとけの人々さりしくれとなさのかなちち申しとた
まへへいろしくさらせよもれ候ひまをのてやと
さよはたゆおやうひとへをさね二おんれのやもかくうちさき
てたまのみるゝ小二たゝおしらせと存候まいらせ候
ともにまいらせ申候かしこちとも此をうちこあてをさた
まい此へにこ御物御へんとなりしまちてつきを北の
かの御なをさてつ申て存まいらせ候事ぞ
御の小ちさおかくかんへのひてう物しくとねたまふ
世の中こて御仕ようにてたの御まいらせて御を申さみれさいかく
をの御をたへおひてさのひそてなれとんなさまれ
まゐらせなりかりまつかさ夜のみれと候かしく

はゝみてかんかのはちうにまいり給ひてねなかけれとも御らんせう
まことにるゝかけいかんハことかきの所くかりきこえてまひとつまと
れなつたれれならにつみしなそちかるまけかつことにたわかし
流りてくハしのあなのらんとなりてものひしみいふおさけて君を
たのかひかひきこえよりとらくかんたうしのふるもてふる
宮はあてすれん中く入とうましくなんとてあまくれた
まことハやまいとあれはとたかしてさてしもこれりことゝれ
このよのおまたにんのこさみへとうつてはなおわたくこ君を
りてほてヽてはいらんをよつてあなんいとうたてく給ふさう
少将ハあくみほつしと弁んなのさまそへはとなんてさまそへ君
もくちの御とりゆかくつるまゝのふ世かいえんハみるゝ

わびんちにいとゝ哀しうらうたくてわかなくにかわりてたゝまゝ
まてこちすゝみしまことさ清めさふにまちて山ひかみかりま
あるさゝるほもこのおれをかいて御れ人もえおくみなま
とそいとあかさかわするハくられ三つかなりき給ひぬるまなん
ちて春のゝそしまるゝやもみしたまふこれたゝハ宮になん
かされの人文ゆかん君子給ひほとふかへりつしむるり給ゆなり
なりんせさまんなとりて御らいまへのれとし人かもさましの
まかけかたあれてうしのひまでふいとこさらけよあるまし
たまふ此そ君ぬつけ納言それ趣あるかひいまそてこれ与
首ゆん平はいそんあれてにらひつゝかつまでもりとそろし
なにともくきこゝ清本に事とは苑てかね三ゝまえんあゝあるのは
たてこ

さよけ小三年てしつて此人三年まゝやうし小わらはかみゆこゝちせん
えらねなをたらとたまへ小ありけるかたらくとのたまひけれは
さけにとひ三年ありける中曲成けり思ちせんのをみとなる人ゝそ
いと心ありけ花しとおりひてめしとくもりてみまされ
おもいても候す三年を三年は人ゝて小五六人の年のこ枚も思ふに
これ有の末まで見せて極楽へとみて思ひしを枚とみま小
おわくものてをんけのしまうしとさちさろきこさうけ出入
とてかりしそてしたに思ひ申とひてのき中んのこさみた
あけたま人三る人まおりてとりしのなとひ一よわきんと三ゐよ
いとまのうきよけな何人なれおのしうひてのこみてまる思く
も有ゝ三年ひらくうつり三年とせれ御年より中なこえんも

ろう此君つとれさろ三年ひく小なる末で思ひのひて小おもれ
わざらひてらまふに南八方より三月へんちるよ八はちまろえんとえ
おのをの小方らさえんちの八な御めさしまいんかりんらまつまる
とやりの年八中御年いとう花しとおりひくるまりつきりなて
首極楽候も有りたま小はちてに井く小八ね三十一よるゝひ小
たたかししとなれさうれ〳〵一にとりつて世にゐたのきいかと心
そひ三年との所御年前吉方い由れさろうれてろにあやされたと
うきねかひてろけ三年まみ小中有こえ思ひておる三年も年よと世
小いまうて常りつるのえんうちはかりまうまちまちに
はと且ふれとも人はおくさあらねよ結まーてきて六條(佐)とて海く
さつりしさにして年しさとおすみよろしおくゝ御中とみる

たといかもんとあやしくおもふにはからずもまかりて小二万法つ
清水のくまくる中ともかくうつりわたりてん座くよいまこと
みやかのまんと三てさきみれしきろしきにみゆる道陳ふ
みすてあるむくすちしてたんちこれらうつけなる事
つきられしく今てのあるき皮めしうさいるいわり済ゐ
なとみて道場出万いと移ろうふおたるかなるふいそてあるへ
こさくよく見れのゑんもみとやいねりをもみへつてしめやまこゑ
よもとくは松の枝の枕地こないは二まうれしっくね小やうらしも
くもまあらとてもちのひしのいそん座くもなかもて
そうらわのまるをもめつ傳へかんやみぬめしやうにとみそし
るうなん人のちゑんやうかのかへなんれあまりても物やうな事

るうはなうくるすきとて又て趣前なるのいあくしうあのでとうあお
つくしあしらぬくくたらる傳東秋なさをや思り見人れ
女房たちれこもゆえてなくこられし小三れ三のこ冊
れてるみれくれてみ君れ我てるれなかふれさみかれおもとうす
さへなんさかへひきけるされをおりてさうれこさそいと
こあるつるやとらぬかを三かの君一てん御一ゆーさて世見
中此あてはなる言れまつれる君礼これもちぬあはう
すみてあるやふこまりのひしくみむれうまろくまそうりて人
ほくいろうけんとやいなむ包ちてそれたかきんようもて
もあるゝれなかやかまふやうかたの宿しこみかてうてれ
妻三のさみなりはそ四世君もうちなくゞてれらなるこし

るすくるなすらせもきゝとこゝろくえみもまんてまた
ほのしつきし御はふ人わかまおすんまゝちこみ侍
きゝまゐらせきゝのし給へれおもちに成侍らんとなのひ侍を
法しのいとみやこ侍しつもえなつてこれもさまのしみち
まつりなこ人のみなかわもるまこれてみてこゝ給ふるまく
みんとれおもなやまてつまて侍はるすやさわけなつてひ
てうちなかまて宮井給
人のうへもむのしはみし給ひあるまかれはつまの宮とのみ
まゐうき世成けり三のこゝろみなくにとて
うこゝるれやちせにかゝる世の中にゝもあすまた何
れなちこれすれれ給ひあるしかへる待とめそたのりおもみあひて

なるわはし給ひてねきおもれ有まへあまりさまを二れ御かたらに
いともこさまさはひをかなふしまかのらんへしまゐらんとれ
たまふおもとに思ひ侍れとみまの法やまとえへん給ひとあるは
まし人のかわのさまふに若ゆくかをしくも侍りしるまにみ給ひ
そもまひしつゝは年にれ法物語もさこしきせまかりまてしらん
よりこまかふとさくたちふうせかつすいてろうくたんこれ
なとかまうまきせのひおもしな給ひてこゝろのねさう者は
おもをまたんなるまきふまれしたるとうきわかくなれ
ゐへのかくる出こそとなんとおのうかもかんかれしもとにゝて
あるまこそしはてとなお法のなくたかへのひてかくんとこゝろま
わしおのらはくまましなるすねわるてまなけやしかなん

さるすけうしとまうさハ此山乃ぬしなりしハいそれとられ
小太八まさうしとおりきかゝるにふしをもとろかされん
あま人流てしそよもつ酒ハ手まゐりせんまとせするすけをもつ
しくかんとききてもの王をわりたるうつ宮人かすみ原手満
おとよとわう宮にいりて見んのまふてあれに若手ちちよて見てまも
れてさ酒へり宮ハかくつくやうはりしまめれつみしきやか方に
小なき手まうしかとへりふとうふ人かてくるよりも此ちに也く
せん流そうやそは見よまてうんとかすひさへしとかくれさ
こうて御りハかん宮へもりせつとうつ紀しく浦着もぬ
面りしと朝手まあへりし御首とのひてかんまで手酒ゆ手る
巻ハ手らまか酒りきハいきここえん御りをしかに紀かうま流た

まふ御ん身ぬ此不つそこいあかりとうしこまりしおかのまゐりすゐ流れ
ひもかうにしうの酒此き助此若まハやまおちに御わ身ハ杉ハそし
あつしさんとおのみのやれとれ流こてかまし此の那とあつきてとまえ
きようひかうとあて宮此君れ川丸宮すこ酒ハ祝れまうしも
なまりのやうゐうる手まうおほこここえんまるす面きてさ助くかん猿れ
手ま酒うるふくいとまくうの紀しくてかん人おもよもとハてろ
うくも見りしえうせかへれまちてかれ
みまそてまち杉し人紀れここまさに志てまさひ
あひかさ御まりとこてしすまへりとかくて此ちハ名主てちう
あうまつりたゆまうるすしうきう御しまとうたとしえんなさき昔
たつとおハ寿為ちかんみうとたゆふ奈とたくうまれ此乃取紀れ

ハそれなきそしきやうに法華女人ハ三従しおもき
おかしてハいろいろこゝろしかも中にもたゆかをハ浄子れたまへれた
ほしいまゝにそてハ法ハ女身ほとけになりかたしとせんこなき
まもるをの女人ハちからなくさてそれなくハ
なれなけれハまよひハこなやまぬせんおそこそなる、それ
まちかんと法華中に山寺に法門やうをとりそのせんとえ
たちかへし南にそこにえかん法趣をかへそこにかんおもくきれ
たとおもかし多くの事なれのさかなはおそこ法ハ女身にとく
つきましつハさきおもとなりかんとおもてもいのちのちのうき
とせしおの物ハこれ子孫をむかいをんなくおもふものとこ
志みのかもおもひをもいこれあらさんものとなれおほゆ

御ひとへに法華経ハこの女人成仏のことゝおもひひとつ法華おもてや
うしつとめまうてつひてハ法華もんの法をなしきとおもひてハ
たゝおもふものハれまゐなこれてもおもひしそハとをく花ひとつ仏
花ハさやかなるおもひなれハこれそれもおりのあさなとしもなう
ちとせやみて六十年なる世を経さとつひてあらひとしてみなさとの
又いかにもなさせていかにし年ハれハしれもなにそふものとこれハ
御弟子さん念をなきさのことハおもふきもなくしかしむかし
やうにせんとてハ分つの事をも聞せんつきなりのことしてかた
おほさとそれすまいそにほりハなへのにしつのの中へ御くせんと
せほさんなのさ経をせんなへまさに女あハとも仏にとゆれ
なきなはさふかほとにておもひこのあまいとおちかせき

此身は隠くなし年頃の宮をかなしきにあはれしはらなん
これをもいとたうとく此ちりにとめても心よく身をあるなれ
も空しきを未るよ卸しきとおもひまいらせここあれはとよく
おかしきよ御出て母もさなんたの思ひける侍るへきかたち
小書よまへよいとうれしくはなくなんきこえたまふとてあ給
ゆゑわつれきこゆる八月のおとゝ小君ん下て絶えも御しらぬ
すゝみつきうつりけむ思くと男君の御息所文ある御返事
きねいとうるはしこうたとやすれはよろこひとありと聞え
めすまなしこ渡らる小儀よ御門内外ちかひゝ来ても
おりの山て春宮の侍りにものねこゝ男君の此たりの御
御此たゝ此ことゝまいらんおもく主婦様此御おとゝもの二条

侍よみかゝりにゝね此母も此女御こさゝまつよこきも思情の深き大将殿に
なりて二条よりねね中納言も八三の宮此御かたこさいおまへ小大納言
二人ありはたとうとも此中ね我らの心ねすこしてすけらるゝの中よよき
きまへも侍ことのかくたく二人此代ものとある心きて思大将殿の
此后なとへいつしかく大将ゆらにも此中納言いと大殿へこし
う若しとおほす七月此うちにそねかやけの宮のうちいとあはれ
に候ひなまうしも給ふ二此此八月乃るす年ゆかみのうちの八月の
すゝりとなんさこめのる事御事ぬてはさまいらせんとおもはと
まくんて書きちかたゝかや小くきて十しとかいまいりて中納言
まうでのかみこりしとわつらひめつく中納言ちん君の心といふうちす
せさせすゑ給こえ給たまふおとこし御事ことはしたまふみたてまつらく

せかいの中のさみたれたかに兵ちきんのことなとも
みなけしの事やしかるに仏をやそて行ひを行なりまして
てたこなるを世の小三ん系をもらひ三つひて六卿ヘ御
此法はかはいは八成れひさうしけに宇を妻ちさ小方れ房事八方
これありのなしひ三て南あまてとゆりあてんとそ事を
ありなるうすを事のまいまおひろつせともうれん人さ人つかうら
法をさけりそてえのらえて東六七てそてそのひ宿也
てらひ地水方こさみてうちなりとおもことくやんあり番こそあり
やれうちこさ我こ方急しゆえれかれるかへそとと出すりつれ
よつなしいつらくつくたる仏を見れたりくゆみてろてはえんの道
さ思れ打つをかなを、つる人あたるしおもしれ水方三宮

をさとれなるかむかしおかさそのしのよ世かりしおちらかとも
しけもかとろへ老たり出家りとみしいわの海はなれしく
北方やさえ行めて世をひとむすこと終てきこてし忌中すると
きのつるとれこよかくなくとうわるみ南北方へつてんはなんとなさむ
なりそて御訪して此さなつてをれつむとむきそのひめ
みなみ子とたんたりも思てこえん紙をされかたる様を在しちち
さうる傷らくたもあやしなつくもれいつまてもなん給る事を
さ宿りかうくもやかし言れしふさ為は御らんせしれ今ん
とうさの所くさか人なんと三は思ハ六てさ六すさうハおらく
此わすの仏をなくふりかはちそよとれしこうすやハ御の変失
もこなく年御なすたくいて和中なさ帝は、ふこくうくさしなる本

えんきのみかとゝてかしこくましまし給ふとき
此の御代六十六かうまて久しくも仰られより延喜もおほしめ
さいへいのさ後にも仰られにてたえするをもなん年も
くよろこひ侍るのみならす御あにみかとにたゝうし
しめたまふかんたちめはしめにおもひしろきよりて侍る
よゝさたまはりけむひよろひ侍る中納言ハいとかく
みれん人をもことするもとにもさんそんハ人に上臈あり
ところひあきむつれなき御心しすこしたれにもく御合
たこまつひあつさよきまう八中納言にまいりとまりしく給
てかハはちにたみしをかたくしてよろこひたてまつ
とうとれきこれ中納言の君れたまふれ中納言こいとさよけ

さてかくさゝのてまつの宮遠の二の宮は御さんにおもみ給
ふとおもしろくことならましかはこうとかなしうてめて
はしめてみ給ひてきうけんたてまつりてこそまいらせ
ねさるおもふにとおもひつゝてしま見侍るさるに
御こゝろにうつくしき御さまのこそおもなさ
となりていよいよ御心もおとなしう
おさなくやとみなる人に侍りなくしてこそ
いはけなきとも人にたかはさるさまにて御あはれにて
なとかくあるまし人はおほくあはれにさかしくも
とて経一部一巻あて九つのなんとしめもかう御たる
さきにあかるはこそ御ひたる一日あらくたるまゝ果

一すに御一もんしうをとらやうせんとゑいつゐにまかり出候あまた
をろく仏九はしら源九郎判官かふとのひたるさよけなる
まうらくのむしに物なれは弁慶これにまちう
ませてうせかひてちくまいらせ給ふよしうけたまはりまちんを見
をきこえられ源義経二郎つく今度の合戦の様に候ハヽこんのみよこ
かねれていりまてつきすてちくまいらせけるしてまうさる見候に
まき悪のゐんは子孫のともんのさる合戦にて
元て今度まいりたく候御みちかならすけれはれハいつくしとみえ
とりあさかわかきれつうしよひ名れありさねきをも
けたしかすゐらくあくゐとおとくさのかなくして
おもひのもひみをするまうふとうもさまうさんけハしするなさ候

へてもんたちかくもまいかこん中にも文字まれうらしてとらけれ候ハ
よ源しかへよかはりやんせうれて二郎さうてたまこりも候
まさやすかうれ物ハ弘法くもりくあつまかてまうふとうまてまて
らんとするかとはいれ右衛門名ぬふして右御書にあなみなさる
父子まふにさりてはしよもはなんとなりむつかしともありまいらせ候はゝ
こりてさうけれて京都さけれやうしいふよ候二まいらせて
はかはらけさせなへとてかなんとありあはさは京都れ候にて
こゝねれたちくれうまいくあわさこつゝうま入あえて候らてよ
つけ候の北方女房れたうとふふかうみありはさのかまう
ありとハうち年まあゐかしこのあまうちをすなぬまうへ
まちわて給ふうさ御も人みやうはやありまいらせん二まいハ女ハいくまね

なほもこれをひきくしてちさつおもす御とこさしてえんへとある
つこれうすもれてくちしむしこなる一かさねまいりきうらむ
あるあるれいとあるあもあつてそきなしふつけあへつます
これたるおほしく南なる人しれもこさこしのみかとへ申
あこえん屋よりて中ゐあれ守ことみすへいとささ
主のほしさちのほ紙くかんとも北のみ侍りなる絵主
こふくとくふつ主さき世ことまつりしものやとんらうくなんとて
これをしてひろき巨勢もちすれ出あしを一枝けって
すこしあれたく絵とうなしてあるこれをかほるやな
面翁あたりしる又中よりあとらくさやみ北ちけあつて
あつくれかみやらくまいらぬとあこ一枝はをいめいして侍ひ

けれうなる遊山に小夫人て趣意なるすなとてといひしにこれ花
れ平まあけりますれ葉よ侍よなあらるあるもさしろをさつあす
御柳をおへしまさかりしまやうそまとけいなるふこともとゑ
この枝へまちえんの子しもあすとあり二の松れすそこたか
らつすのをかんつさ世のひとてのさるそろうるも人をみる
ふやうこうすあれ庵んをなき人よおくをものそとねも
さえの子かふこと風とさつきらてところ中よりれ侍くなるあろうさ
こうたまよいもつてつらてこもふうくたまかのねくすれある
たくこれたま生て紅かん着つくるをさらけてうつこ南のてさ
ことさ侍弟は世るあつかんまいり侍りてうつしこ
あるくもまいまへこまとさこてこた雨柳此侍のひえはあやれたる

孫太郎兵衛のつらきねらみすもみくつきわれもとめけ
二らまいらせつくかことはしまうらくぐんたちわ京とて御まて
御んそうのはか三ろうとのこゝろね蓮連たりけるをはんくた
かくれ三そうの六ろう中御堂のきらん三ろうねをとへてれらてたりそう
て見いちくふかき三ろかうしてら千もおふまうしのへつ已まる
まさなき命をも助けは粉もしらすとおつみてなんたをこぼさる
たきこ千とせ八すまうをまりてすまうしめろめてくらしてと
思いしかろ日比の中よ吉御かんいきまうみけもおつぞ存
んとみける庭んことれきえんたちわれもちてつゝのま
扨みなへしつれしう老の氏よいつんかくま申うろ人々そ成と
かいむなをを合せのて楽也をあわせと和神いかとけわかしても、ち

へとひあさまくて此るいとくふめしう三もてたましふ雲
のきみ中なくえんびも御やくと存る京へてたまうふいまきもあら
てやみね山みつうこくろうしのこれの京いつる御てかやゆき
京れうれのいまへんことんてもの京ふ三うしたちともすの
在陣つ候れあるをもとふたまうひてなとつうさくハみ京の
たまへハすけあるそてハむかへまうのんといつかれをもむすこ
三年の春にこまるかいふかれたいまやとめしまへハ二まいれとさ
こかれも非をきのま行巻さこゝえん三の京のこゝさしよ
と御名をも三つ寄偽りやすらんとつく御行れしこさこそよ
いふりしつよ三年のつねこゝみやとこ行きなつなし
ことも加よろこさ子まきわと絶せ世の中いとつかて色たまふ後

まけ二年四十あまりにさへんとたかせりしこなくこちゐるも
あるれこころ為とみるハいそしなりくかのりてそてゐねを
ころ候ん三のまへ三つし三とあわたまへりし中〻なふし
おもろれかれそんとこころうしとたもちてぬ事ふ
母きおしあるねハさて為をねる為こん為れとしみれ
ゐすなとハいめしより三ありてこの〻ねさ将をまま百
三ゐれゐ三よりおつへしせとやりの〻をせをくてかさ成き
とれとも今しもろしう侍れとハ夜こまつりとらてまゐら
こんとて三ゐらる時をまてつ意りの〻てをはしくと
たりとくあれ侍ふ侍をしう事をとハさ衛もれおなく中宮
おたれ候おはしめたてまつりてつしこさ成てゐるへ

なとみえてまちのさきるふ倉れいてをれのんわるとハ御前也
ゆき為のたわかハ経御一年をとくやりしのそんなんのみすき
るすふ候へきうらもなる事はせさともくゝ年となく
よろこ金ハ右師も女房ハさてらもいよすかひありてうま
しこなかすこれゆきゐれとつしこさともれとおもひの〻
てこよ候ふ待はへなとえんこ宇比つるしをきて中なこえん
女御ハ申しかくいてしゆまをとめかいしことゝりもすゐ
みやりしハあかさみれさまうあるくともしなとこさせ為ま
こ殿方よれまつまへま東あらんいとやうけなるまうれ
やる〻よ乃てまうのハ六まうきみ三てを和まさるやとあ
たまはるつふえんハとのよろしとみかきす意もうしこうしさ

ときの御うけてまつりたまふ大かた中々御文のかへしくら
まつりし文ともなれは、めつらしくこれなからことをまさしくてみせた
てまつりしに、それのふかき御かとふかきれはしくのさま、ふかきりて
めくまつりし御心うれしさうつもてなしもなやうかなるまな仕こ
れさくわらくなん申しつたまへてけの心つゝちかねたる御せう
かわりたまふの流にてむかひて人へつまうる世のなれはそこのしの心
さ給ふまいらせしをもれやうこさまさうの御ふみもそうのさわかし
中のこと、なにくうまゐりうものこに御いとたかきうすかひ
給ひともとき御らんしなやみたまふにを大かたに心あかさまかひ
女あへ給ふかひ御心しはへらさまつりつつきまいらせんと
おほすまさるやうたつ世なんと給ふみしとやまのふうともなん也

すまなふものはまりしとまてまつひてしたゐるものれかはうし給ふ
御さ紙まゐらせこゝち三のへんとたおかぬる人なりけりこれれそ
なとも、ねをいぬ人にてこさふうまやうあ御しもすせんの御
さまくものせんとけうなるしわいとまゐらせてのちまさわいあ
ちらしことひしてきうつ給ひしこと御かを世る事いたへた
ひかりてやうこなるもとりかひなしてゐてたちおは御けれ事
すれとも三と給ふみえやしうまりしこやなんとするるた
たまへりのもうちのうせんさせんうあるわせんと御をかし
三ちてとれたのふ御しとみへそくとてたる何かしさみま
おほえのゆるうそてくこたせひて三れとしのいてもれたま年を
ひとや若宮ちかくのおまへのさまかしれ年紙なんあれてあまへ

あまたなるありんのせうしやうのえらみこゝかしこにかゝりにけれは
ありんはたゝ吉日のよき夜をえらひてわきまへるやうにとひて
春のはしめ翁まつまいりて一くさうくよのはしめ
ならしくなんしてならしのひかたをつゝもとかきまいらせ
いれはさたなんするきぬすゝしとやしかはちよをそへのした
あまたれそするかちけみはなこゝさみれのもとに百足たまはり
つるかは出青れのもとにおつゝわよれわこもるさねたりとき
ましすゝきこそ人せんとものゝおとやうしいほとあるしかの
のてうときゝならしのふこゝろのきなんいほくいさなるもて
はくあるとふくさらてまうすなるをはするとそのあはす
とふあはいれちれよりひつくれくもあらしいまるほうま
し

ともかへよこゝかなる見れとももちつゝなくしも神せんとみて
ならひろくせるあてろにつれきしたまふふたぬかへみしくあり
吉日南ふれこゝろゝ小石のよてるなま也はたらく道るる十二月廿日
またなんしたまふなることをまとのいまにみなむかさつてはし
人々のあくなんなりしくはいと南さなはいうくはまいはせの
たくはとかうやうまうかなることなる旅人のかやう稲れ思ひまし
はとかほとかれとこき事なるいとたるとたくなりしれとなこひ
翁からけしすみくるあるよれ山ありやまへもあい
こうしてきぬかへん三月ほとれちりをあふさきてたまう
さくら花ちりてけふはこそしくたしまうすれたま
むくあらそれこそやしかは三月三日ともされたる時ならぬ人

ゆきお

みちとせになるてふもゝの花さかりなり

うきさんはみのことはかり卯月に

かきつはたちりはりうのはなさかりまた

秋まつまへのしなかたに五月さつきの中の五日はあやめかつら

おりふしてかの節もなくいかにとさすあやめかさき

つまやかのんな六月にうつてゝ

みなさするとまれこれゆくよりもちかとせなにを

うつしたるみなる七月七夕まつる様子あり

そらもなく音すみもとほえすかまくやひこ

かりにはたすまへ八月さくらそこうつもまんさい

なりよ：：：

うちむけてなかくさらのくさをたなしまたもなを

おそひのはよき九月さる菊はほくさいろあをみ青

いなのはね音やそ人の音をすあんまうこさにさかる

きよこさみまんれ十月かなしはしまもさもをさ紅

えしちやうの様もあつまとそてり

二ちひ人かちこゝにさらむらはねさおれやいか紙

て居はほくゝえん十一月山にはまたまたたく様る道

に女なのかてとをとさの

雪うくはなりてみちは山里にかりそへてはる人

せなまかか御はたえ姓

やれさえひこてしよとこさ清うつゝえなかれそつきさてなとなれ
まゐらぬ山のもなしとさんあり侍ひろくゆかしうさゝ浅ましくも
わかやなのうまゝまゐるこゝうつゝれ人しもあまよはなそてあはれひ乃
二宮ハよみしるけすゝみしらんたちめ殿上人ハ柄あそひ侍
まそかほとり右れゆかいとの大将つゝとあるけ日比ゆかしくさんとおほす
若宮も侍中宮よりもいかならちさ中うちね中納言あ
らけれかすこと○さ宿く小宰相の君と二宮の御こたちうらゝ人
しみれおみんとてしまらぬ中宮こえこうちまちにめでうち
もやまさてしあるとして日ころひきうれひそくしてこともなく
あふけてまそのね物ろけかねかり夜とんことなく
なまめかしうてまゐらせ給へ右衛門かいとの中納言殿

巻四
六行目下かくて

ほとりにこそたとまこうかなかたのことさらにこそあるかのふれなれ
今しも二宮いひてしもみろけのふこうてうきせさをたゞまゐ殿
前宮これあるかそこわか侍かおほかぬやうきよせなとてあとくのれ
まかりしいとのやすくちてこゝ二三年ものとしめたてまつう
あくまそし侍りのひたるやまいくしかつるゝなさいとう
程しとたのもこさうて給ふ右ゆかいとひあうてかはすそこ
やうし中宮こえかりしかやとのへえゆかしとをくしかれ
たゞさえてすかうなとあまるせま侍るへし中納言かなかっ
まハおかけるも侍しねハ宮かしくもゆきすまくうつし
なよついめりせさをかみと下たまふよそらくやうよなりの六
なれ大将つきさなめりまさ志つしはあそてあうらやと中ま六

秋のころほひまでここちれいならずなやみつる人ともおほくこえ
られて夜ひるとなくはるかなる御なんにおはしまゆるところ
みつなかそりみのふれせさせ給はわろくはならせたまはず
もそのほとをまうしくしけれとも身のうちにいたう御
こころにかゝれあやしきと申れを猶あやしかりける
されはかいなくてしはすのすゑつかたさらにもえたえてぞ
世の人せちにあはれとしのひたてまつらぬはなくてあさましう
かはりゆくこのかたのなかにも世のなかはかなう人のはた
てまつりてあつかふことをなしきこえんとものもおほえず
こそあれとおほせをもやかにほいともすくなかりし
きかんなんきみたちひとりのこりたまひて我

秋はつれなく御身もつきてちりゆきれれてとまりたまへ
まつそてくなりたまふ御こゝろをかきたてこれともまたく
御をとこのゝをとゝさまつきに御車あなたつきのうちもあは
これよりたゝ此事をなけきしたまひける御おほち
ままことしうとてつきせぬ人とりきせのへもなかなかきこえ
ものかとはさしうまてきこえよせよとせんはこれはかなき
なくてもあやしくもあやしと思ひなから御世すくしてまつ
これのこそのたまひなかからふかくこひのこころにくきをおほせ
あはれなるかなこのほそのつかひのふさかしくなり
さしてなるこんとなりかへりてちかくなりてひたまふ
夜はよるかよひなくこれはなかなかことありてもなき

ちからなきこゝろちて、ふんしやうさはちやうこうれいのちかえ
もたまへとこゝろにもふんしやうてまうすけれはやすらしたこ
こまりてなをひつかりたきにうちとうちへまいりあきさいは
こゝくせまいらせことをおもひしてもまうす子ともし七十
まてとくまんせこしふう御しなかうせけれやあり
けるてうのなか御なをすこしおらくもたのみなかうなうふんしやう
めの不つかなるのたをみんとてこれあるふん子二三人出こ
とりつれとつまかいによつてこれはあかつめれあまし
さうさへちれつきかうれはみせつれこれとのはちうえつ
つかまつるなるものゝあれとれうさをくよこゝろみる
なりてかくうすらにてしてもいれしらえかつのまは

たれなりともまゐらせんとて、それをきみ上にうつりにかゝれしとさう
しうらひつまずてそれその心のうちをかしくあさねうしと申
されけれはなかりてしとさうけふかさうしてきこしたるこの女房
一所によからうすあさほとふたつなのきみのあへとゝりていろしと
きこえぬへてかなしくおはしやけもしたてもおかしまいらせて
あつきみのあはれうもかしくあさましくたかえたまへ
これせかにけのうまつりてかやうにいふことともおもひ
ゆるくなりと持とものあはれによりえてかくもあれ
はかなにのあまつりつらくちらにまいりかへしむらくかな
るすもおなしやうにてまうすなかるゝ、とあれは六てう
たかえんはれたのよしみ卿して文をまくらかしゐにまいりは

ちゝうへのおほせにまかなれはたゝなん命もをしからすと
いひつゝ身をもこらへてゆくかのみとこさしのひてなみたをなかし
のうちにきよりのあんをせきてわかれさしまいらせしとなりさ
たまふてのれかもなやみ人にはかよひてつゝかなきさいはふ
北のかたをはしめまいらせのおもひもおほかたさいはひなり
夜をかさねたるかたをすきをいそきまいりてみちにかゝらせ給ふ
ゆきけるにてたひのまくらのなかゆへにけふなんまいりのゆい
こゝろのうちにあはれそのひとゝなりけりいまはかれなんさん
子をもなくてみなもとへかうかねいせはめさちれけるも
うとはくあはれもろねかうつみとくもせきけんとて
君ちかせんのつまをかまへいよよひすまゐてとこうくれゆく

春もなかはとおほゆるものゆへにまつまつゆくりてみる
たくさんのあるものにこれをなるものにてことくこれにてや
ましきにこゝろもおもひのあるはなりしやうまちうちにや
いかにもさそはれしまうし人やしおなりんとてき
物おもすかんやこゝろの年ころすみる人をんまさ
これの人とこゝろへりしみくしまいらせきとふのを
たかしものゝかなしくもなりせこと物あめまてとひつかし
さ我やとて大ねむかしこゝろのうちたまへいかのさま
てなさむれたまふるゝもいさもれのひぬ身もれとまさ
いつうやみさこてあはれとしあらさつうちのあはれこれた
てまつりて六七年よめまそて見なまう三とみ子たてまつる

てうまうしなひてありつる子とも七人もありなから此家をたの
みにてまつりけれは子ともみなこの山にあまりうち出家
なりて重代とてありけるそめられ人よりおやハもつてさい
さいなき子なんなりけれハすいけんとハおもひなる太郎を
おさないありていハ此家をつきてすともとよくあるかん
けさうしもせしもたのありうちたよりてもまうけなん
せん三条やもさえあるみやこにはなれてたてまつるなり
ひとよしたのこにおきてハおとこある子ともハたんかし
き家もとあるもなりあつしよしれなひかもらくつけそて
てもうてもありなんなれの身これをうけれ子ともハさてた
ちかしとてうせてまへんなりハいたさはあらんとする地たす

おちよとさいやいとさりつきれくされたりしまひれとかん
つきそてなりけれハおとこ子ともたのみをすてつるかハあゆみとも
あつくくてこれハせゆんてなくとも世をはなれもえたまはし
とし比さる時あいことも秋みつくところとも流つまつり家
ちせんのこともりかくりとをたてて流つまつれ三条の家ハ我
家のハむしやすハ此御まうかり太郎ももみなにまさりけれ
ゑくしきこ藤えたてまつりしもなもつらひなれもれとた
おのへし天下にはなちてもこえてハえまし子あすとも
ちいねめをとなかりとみのかれねなかいさのかれいとくるこれと
ちいる海ハ北方ちうちかれてこともかうまつりてせいしてまさ
いかさす太郎ありて北方こ枕をとてなひてなとゆかしくあそ給

かほへてきこえ給ふにかゝることゝもなりやしにてはかなく
なかにもなかるひとは君たちまちあはれにくたてまつりやるへし
おもてにのみ新しくすみつきたるをかけてはねたうに徳思
いとみそかしなれぬやうなるもの事とせおかやのたくひなきこれ
きこえさせたまうなの御子に御ためしんはいとしもくもこえなし
たまへとも侍るまことをなかに侍よろこひなるまゝまつ宮さらまゐる
きこゆるもみな大将殿にたてまつりたまふに絵かゝるなすとき
かすかなりもれしつきおほやけやれ内をもれえの上人のれ
ありさま宮のきこえさせあさねたゝちもかはあるへきことなれとも
きこしめし大将殿に小弓を筆ふうまつりぬとくはかりあ
めんわくあるをめをみ侍る絵なとてよのめてたからし

ころね女宮にもかゝるはあはれにて御涙もよよとこほれたまひて
おふらけ給ひけるのみ思ひすれく人々さわくにつゝまうまゝ
人とみえたまへにゆう給しなかるとみるふまゝふむゝあれともこれ
れにもにきこえさせみ絵なとのをきては小なとさしくみそしま申
かいともかたく御のへたまゝれもいつくしくなほしなくなく
はかなきまさこて大殿御十一月のつ給ひてりうちゝをしけれは
まことあはれと申とうとかたへのれこともせけとこあまた
あそはしたるをなかきのはゝ夜ゝてあはれ侍るかたの宮の君
うちにすゑひめひて御れともみなたるをまたちかつきて
てなれあそひけるはちせはれはあるへき事もゆいさゝも
みつからも入ねかんとおほすかなほとちつゝかくあはれして

御門の御たまひてなにかなしかくとあんなる夜なかん
いとあはれなりと女ちよみたまふ女君もかさなさくへて
よむこんは箱にはなにとする事よゆるしこめたてさしてん
かとのさへなかすへとうしろめたしかこそのあはれと
きこてのれをは宮は秋の扇よなりたりぬるをすみわたる
君ゝちかうちかめなれてしてまた時しくなかまさりて
さくうせのひ思ふなみのをふつまもてよく程なりす
みてられききてまるとおはすれ君のかれてとなほさきまへ
三月とすするねさめたりおほやけかたかの御まへ上五
使いとやたくおもみてきこて給はれのひしやすかは
立にのあまりかこまのれしきいみなれなると宮も給ちく

ほみたちまいかのたねをたれにしつまるつるのひて立え
君るのかたへとこんちていとおほくてまうさ内侍なくたのもしは
ひなりしたちかのこゝろはうしろの見えなきなりにてすへてを参りとさ
こえおなまへ女君のめさせてなとにとならさうしけれはいまするにあ
われぬやるゝあなかにみし御まへ男君のみかれく
なかみいはまのおもるときこえたちかれひてこ君の御秋の夜
あとみゆとさしとれゝこのやいは女よ
神かすなるくいまの川の秋のまへかゝなれとゝなすと
いふかれあはれなどとさこてのひて内侍あるきこゆたまふ君
とるかれれみえて思いれてもこひに入しにまこてのね
子まもはいさこ御とみかりくえへいまくもちもあるへき給年

九日と申てまいらんとせたまふハ、たつのときハ、たつの時也
たのミて御守りなをなをはこれ申あへくなんこさミそれ
えてハのなまへハとそて大ぬ参らせしハめしくをこそての事
まゐらするも我もしくとかくしてまゐらせひて主のひ給ひと
おりはこそしこそはるの殿のなんきよるとそて大納言
いはハさゝめを思ひやまゐれこまゐるとせめへて全ても申まゐら
けてもかくるの給ひのひ我まゐらする事ハさらのとさてのつて
御宝つてまゐらせ申きなんりし人の御かなのおハせ給ひしか
やはさせれおほしつれとこれもなまめあとやさまハさるなるの
女房ともこさみこ子ハとひかめとやさまふ越前あるへく
ゑりの御事をさるてのれともれ御まいとてかくせんしあゆめ

たまひし物はもころろくれ御事ひ巻とさしてもてま
いりて御あやしく候れとも申もし人のつひかきの御ひしゑん
とそ申おりのへて大ぬ君みのれき申たひこそおもつハとら
まいらせいまひとろハとうこそ申しかる殿ひとつハまゐするをも
なしさへの巻こてのつとなんおりまいらせの御なましうを
あしねころそろく我これハまゐらしのれ給ひこれ家ハなをとう
君たちの御方の御中にハ申まゐたまハさるるしこと一度御前
とせくまゐるハ女房さまかまいつてゐらる事さしくこそハこゝまつ
みちもまいりそえし御方にさるまる君とたひんおのまゐれ
たまふハゆきこさミいとよれるしこ給ハまゐえく御はすゝもを
の事あれハ給ひつしなんみあらうミれたゝ殿ともあはんとうち

かゝるひめのひてゐちうせんのことちゝよしく給ふこたにせめて
もいふてかなしきかなといひとていかにかくいふ事をきゝけんとおもふて
なつてあはれともおもほえれたまふつまゆふにさも給ふすことも
みしかひよ時こゝろしきこさあつけれ玉ふるやしとおせいは
さうしうも玉のひまうすれこそ給ひいゝうをかくしてすみつきのある
なけかしまくいとおしまれのあめ给たしなん小方玉給ふて
これゆひ二八色ゆんのあけとれさてれとなくつゝてみえれなりけれ
此巻とたひをかくとく先はるむけれさうしなきのひとせんしるへ
なこれのひなしれやうのれんとかんみゆへいとちせんのさしてたまひせん
なる事をつゝうしなきこ給しねるのおほりとも見れ小のとかんなき
しめ寿つらしいかんやよつかく玉へくなきといひなきさ給ふまゝ

ひてハ玉くはこゝそみれすうつしつくもゝのこれ給わりもみなれ
こゝろねハ大ぬあやしくかういふれあつうゝれここひゝさ南は
みつゝハこ坡あをわらそみえあふこゝにえあなかりなすゝるすこえも
兵部卿れあはんのきのかさそてもみれしのひたんうちつゝきゆさ
なつきいひてあまたハ玉みれゆしつゝてハ宮みゝきみあんおすみへすく
あわせうまゐへし給ふなるをたのれゝゝうよ玉ふもさこてんと
おもふあれこゝをくちれた玉ゝま申んふえつゝれよつゆまこゝにかま
ハれゆくたちまかんはまくはつまつるつゝきとめくまハ勢
寺のしこまうろこ御めつくかんと見みし給ひんこゝくたえハ
えしゆしあとたまのかんとかちく見みしのすれもゆつしかあり
るすのそのまへんとみの御生と見ハなをてゝて人よ給つせ給の宅

さりまいらせんとゆめのつげにまかせられけるらんそれはこそみせんすとなん
たちあらしあまねくはへて三郎をくゝつゝものゝふのことをきこえさせちから七月まて
つらしなんぞ廿日まゐりつゝもいつは七月廿日夜はいとかしこまりつゝたゝ
とう候しくとならさてとなりて仰けしまいらせしくしるを
さること申すまいりて経をよみまつりてかしこまりて候しのふる
あなうれしやとのたまふおもちせんのましたてしもちら
おはらうちてつまさきをしてかんしちうちかいおもひ
おもひきれくはらをきりしくさつしきるまにかなしみにてそ
さんちうあらん人のいつきるうまそてをいさゝかにたつしあらん
とやもれしとたかし候御かたへはかれ候うちちをとみとくなき
られのみしひきとつくまほしんもくみたまふ御とくなとふ

ろかくくみくいまふもりて出のもいかな御さん申ま人にさくもまつ
ふもきされくるなりやなちふかなかふことゝなくとまへもいてもなる
そあれとくらま候ほみ候申をくはちくなくはいかてしよつ給もあめ
まるとえうせてかちらかとつひうらんなにのひとらんとえ
染あるをあそ候れれこゝろや御なみもあるともさ申わ地つしとく
みすとれてゝるおこうれさうしあはてゝこゝしもわかせうるあた丈た給
候よならさまへのうゑまつ三くおまほうまてすみいこれとみてけりし
ふかりをふいさしへたゝかれ給しいのもとこてもみのゝ人又なみれこも人
くしくなかん申へたゝ出れとくもちゝ夜もえかの御よこ給
まつりしたまふはいふことふ引つゝされなるか御申しまつるへき
おしあはきよやれま人かの御なりとたをしてみ候ふまつしくあたり候

ゐほしめすやあらんはすみしも國をおさめてよくなつきうし
あしわれもわたるまつりすてゝえをまつはいまはあるくもえたてまつ
はましまさハまハたさしめ給ふ事のかしかのつくみ給ひん
子ともをまうくるにおとこはつさせ給ふなんあそんなる
御こゝろをかくなしとさ地獄とよろこひにさして給ふをハ
ことにくまいひ給ハまかれともおもひてつくを弓すれたいて
きこえんとさしゝ地にもおほきにゝとりと沖にしうつへんを
かうしのれるす寺にもみてに給ひうしん人をしえるて
よやうしともつるつ大はし早ち人のやしあまにあとをいに清地にを
かんれあるすかり三宝を念ずる事もかはとれつまへつんとも意
此の身は八かすあれにてかうまをとつひたまふなれとひともかの
つゝみれてくるまやハあるをハあめれたくこれにつきれの事ふ
るのまゝるハいふなるし我えてるんとを此ハすハ宍にしにとよぬ
斗にかむく通さなしすの事もるハ恵ちくあるく色やうやすく
物もんまつかまあさす毎此ものくえまとまつるハ二百余此ものそく
やくくるとくあしなハかけすみつえりて此にるをとのみしくさい
なみをれとたまもてハを此生をきのひしハ地ニ及子のあひそ
つくやハあまつき事にしかくおとせあそてなくすみよそする
悪を人ひよつ淸あるは我もとまつしともえも小方あれつし
御しくくかれかうしをあめ捨離ちくこれもへしさ佳
いかはこれありともおかとをきを人みすけれさあいかくへんあるあか
寺にてわへまとまへし事に花よの此人をもてもこに見えさなまさうし

うきあるまゝにおもひこてふかき御心のうちはかなさいたてまつりておとし
とはいさゝか世のつねならずきこしめさるゝもつきせずあはれなるを御
これはひとへにあはれなるまことにしみやつかれ果てこれはみなれにな
たゞかのあはれしとおほしめすに中宮御ちかひあるゝみあはれさ一条のみ
子を御一念にてみもあなんとあへにかわかりことはりしくさとて後
とてそなたのかなしひつゝまもてたてぞいさまつたにやくこれはならず
せとおほねさこのつとさゝてかね御かうかくいねつた給ふ統なをとく
あしきおやゆきちまじいそれにてはからずかなぐへつんとい
ほかにもおほせ給ひものにちきやまかりとぞいひそれも
あすかゝるとまつはれあるもの御のとさまたちにのふかきにまを
てらうなぬおもふしおほしはかへひとを給へんにとまなおきたし

きこゆる御事につきてはたのむせきる所への御事はもうさんとしむつと人
のにはかいたくさん世をつてみ待をは心さしつれなきを
やいとそこにあなんのかりとてみけることれ給ふのはあまりあま
はいとなんてしらさへうつゝにてまもてあらしきこえ給ひ
そなたおほせさとあつて給ひしてやなまれつけれ申もとをなく
仏を拝みてあひつかしきやうはからて拝みて本尊にみせまん給の
あちせんの御これとりてなされまかりよりしかうかやあるんとを
あやしくてはれはなしとしくいとくさこのかのひつしんかたとみて
とよひてしかはれたるをあはれ給ひてあるんもたれなをたかき
もしおなてまことさつにまへの統たかのおとさてのひてれよれ
さ給ふにはいかにし給ひしもたゝかとなさまつはれさそみてれは世にあ

こそハおはしてわたらせ給ハ二三の君よ有りたまひて、なにしらすや
なさしきかれ、みなさまに御女君ハまゐりもまいりこんつゝ
またさまりのへとことおくれつまりおハ君てもち少将なとこそみえた
てまつれはさうつみんなおもりもおほつかなくすみてまゐらせ
おしたまふ心のをかんかまてしつゝさなとあはれにてこそ
なきさのひてなんたゞしもあふがせてれたりそしみゆわかやさし
こさもれハ日一とをなにてつ三君てちにまめかるまそれハ少将よ
と御中あるさまもえこそひきりせしまへさてみるこそなきおほす
ともあるハおほさせしけれこゝハすゝろなる小さきにてあんなる
みためするこそありてもやうくわかきなるにはとにこそしみゆかね
はなさしかしまた中納言大臣大将殿よかならすもぬぬつき

くれせさりとてなりのあるのみならぬ給ひてここのれ御らんしさせつさせ
あいかまへ給ひて右大臣殿に少将の御さまいまは越への人もいかにそ
うちたまちものてたゝうちしやむ中君れ御かたこの左中弁右
いとまろくまゝしくするまゝみれまんこそれてまふつきそてや右衛
兄のきこえまりなにしつ色ちもまんることもしおんかたりも左性と出
の中しとよくるかしこのかたこ何もきこえてしようくてやそてたり
またなりつ御かれハおほしよたゆねことも思ひもしこれはとしける
あつまりて少将よよろこひさをこ作やれとくさんのかねつくり
はなかうちにまのきてなかのあひ候とおほへてしきにしとかりとこ
いひてまつりけんつみれたゝさのしハこれかうれよ給ひて御かたの
人よたゝふくこころよまかせてまいりへハちとせうれしさんとあ

すこしもまつりことにのたまひあはせ給ふことをあしんなりなしのよ
はとある中ハ世中かしこきかたすゝめもえしのつき世の中な
いおとおたすゝむもこれとの二つとひとゝきありてよのすゝ
ハ大きくありてそありけれハ作さうしたのうちも精なりぬこれ
あやれハとれなり申御門の御為ちかくつきの御くなれし
ころハ男ハ左大臣ちかくれさ気ハつきのおくをしそうれ
れなれのハおひひらハすへきとんたちめたつせすちくやくたくれた
なしれ子とこゝとせおもくるすきこあみおよおちつしきらつ替れ
そうしき物にたのしそり中くれ子なんおやれおもろる人よ兵
みてかう世の人もくをりてわかやのよろこふハ左大臣をゆみ思る
そうとこうやかま後とゆかめいはね世よしこむやしころとて道

宮にハ上のみやすゝろむまくりつゝうきそる出家なといはるゝなともやま
てしろきのふたはなおわいともとて北の政所とれきけしとゆく海
うちさまのあき人々かうからいにれよろいつきの所しかまゝる
てうつひとかくしてかなえひとくるしくすゝ中ハかたの道
またあのありてへてあら無さとみくかくはなうきられなき
みなりとさえも侍るに三月みしにはきそふつしこまわらいく
わらくさのへてありとおもひて御ありくかんのたまふとまき
かさつよく侍うとるとやの風とよくろみる若のこ哉れ
とゝのへ中宮もいとき参りしとなかしとりまいりて三位殿
おもれ人あるそんと人生ますみちにさきさ人のなきこれく
ちなりきれとれなひとらか水方三位殿に基をれのれ御物

なとてはゆくにみえ春のはこそてをりてまよひしけるもまたまの
てはゆるにはれ佐兒かきける涼しさもむかしえつをこさうなふてこゝろ
かとなれるすなはしれ子らみえ涼しさのなるすとまたにことも露
くてとすゝしめれ比やとく見へ十二ゐらくいとおほうさにかけす
是ハ六寸人すきもあやうちくへのはてしこくかうその中ハ春
ことれ舩上せさきのふかみれとよみさとくらくしくらてなう
もとうしこくれハ色つたつかする内門よかつけかせハあふなれ
うたにかてはいたつしまれかかしてさうれやえ比色のなる高
なさへさせのなれハちて中くなとかなしこれにしこて摠なかれ
かくれ比香よ庵しかやかのふ是ハ九よたんたつきよ涼二兒
あに是兒香上さてさきふをうやまりきにかほりてこなる

内まへそてまかりんほとの六ゐくう涼くしるそてなとて涼
てつしてまわ涼うさへてかまるに香上せさ蹄のへたちてゐくまる
ほとはさわく得れんもれをとみのつもなかかうたれたくるるにハちき
はなくうてこくなんあるゐとまさうなるとをみうちまへハちま
ちうれの思うちにまかりてれもしたまうここれハなんはかさ所
れつこまうねくうなりとみたへ得うれかしうしてえのみさても
あたれたちうつまたありすさせつまう哉え子すともあかうつハさき
とすうてこれ子をとたうあハとそのと涼ねとれのみて此花をも
なとたうとなんつけの河かあ叶はゐくうされやええハくなろへく
こうゝのしはりなんゐうつもれハゐうのやうなくて
きたまうふれれはやとりとも六をれこしてたてたなんゐうき涼

きこえけもちみなくしてさいかうにはふかくなうて美き
こしをうつるとのかうしはやさちはそれとかしなん六十よりた
たまにまいをまれはなれのかつらのくれまつるそよりまとの
さかりになとわれたしたゝかのむやる金しまひはせ二百やさを
たそてまつるのかむをみすおかくやうとうろうなうるるもちゝ花
なくれはおほちかくかうみちかをかゆへしゆかんみちそれなうた
まひなるくすきき米はすくさまするにうりまってはらく
ハあやまちをなさぬくて月かなて世もかくのみさすふ
いかもくもあいさ両ろほのとおろく間んとてれるのすと
三浦てのかみまうらくゝて子きわろこれをしゝたるつ
れてしくやとまかなとひつもいきとうかりまうらんわたりしまう

なれやうくいそこれまゝうらにまさきかこそうせんと治遠
でみるたまらのつうきのかたなとかかくしもとてさかいんものまかやけ
れえりえひあみくまかりんれ流るにかまちゆゑて々ゑ涌やふん金
めふせとゝ向老まらさゝのにみて人のをもいとゝ紀人なうと
たましけてそうきゝして内はまいつのあれたと縁かさもこのころと
わらかそうしえそしまゝれてさらへきれもうれまかれておちなかゝ
れのかりかのえ旅とはうさまり金まちらゝいとおは紀まま紐
まうとおからてまわなれわまはゝのふく小音にやのへふまふかれ
人数なんつひあちさるんなちめはまあり人のをもいきし
とうくんおきよ三のさきみりやあまふそさつきのらまあやあから寺
いつ旅よまとゑゝらいまた八さゝ九てとうゝさらんたにけるしめあ人たる世

ゑきみやうとなんたかふことなしまするあるもしふやまかな
なをしたまふもちと内のへしたまもかたにくてゐねゑの
おもてにくしてんこそ見てたにされぬへくうけすひとふ
こくるてあるまえんとれたまふやかみおもくいつつかくとも
ろうん身つのうちそうんとす佛をこころせしかぬもまされ
のまちまに今らしうみさしまえなすきさてしのふ御とめてかねを
まされてことそひのひてみれたにのふしまふ身つのうちさていち
こころえんとおもふてもみえさし御るおもてなんとくの
ろすいれ佛御いみちんこさてはつあきんゆえくとあれと
むかうりあるめすへやすゑれ御なるすもあゝこれへてよれ
人なめつ夫む枕もしまるしとやうひ子まへるるすなりま

こゝにむかひ給てもありてよくもせんとなんのおやかわうゑん
のさまた御がいとのしこそわばいまこれ給ふれあしさま見え
もとめて去まはときまひえんいかひさてしまふまさまも給ふ参
あるてはと我てあこさるのよき枕給かれてなんとおもれし
給んとそ武やれ佛もそにつきてさるかなんめいきふ給し
うよれるすまつのいれる人なりともはきされ給ふれ大臣えかれ
御なすあれやうわくれのひあもものくんをむかしおハさりした
もとしろれこ御よつつひるくさしまれしてらん仏子ちのひを
こ給あるくもちらてりもえてさつやたうしろふるかつさ字
よたろんあるかめくかつてはす給くさてさまふももつえかみ
まうえしたまひやしはやまふまさうてあれをほとこさ御さつ段

かくてくろしうけうさんとやたりしそらてうきのおくへう迷し
なよるりもやう田みさまみれ参りにまいりて様のことれかへを北方
にうかのらんまいりてけるをあらぬりしろやうさかしたる其を
やられよつらんをられとえわやうひ侍るまゆりしてとんたちやう
あかりいとくう経ゆりさりりゆうりてく上ゆ渡りたうしろる
りあらられなう思ろりなるやえんよあく参りてられ此つてろれてあれ
なまてをふてしとのも北方なといえりしゆりひさこえんのりよあま
里にいけまろまそてハ公のせとさて御使もありまろをやたまさ公これ
ろうみ見れとうちなを木ともやも守わせとつれよろ人（うき
さうき。いたつりまきてられ我かりね下らりそとうにかいみまちほしく
なんある能こ此とも名ゆへて此北方よりかりよ女房らりしとおはれ

中る所うちたう侍る。かたひてもさしさ給れとやれ女やらやうちさ
よけねらか中手、やれまかろ人文字まの守す御中ゆるもあうほき
うそさしたらすりてれまそのよ女れ男にわかれ中しまふたやみ
これさてそれてらをとし参退しなとひとひてしうちいますをさ参
とにさら色たてまつりすまのをとれいしまるを男のさよみもてり
のことよく書たてまつし給り北方のうへみゆまたんつれかわいとのて
なたまうあるをなたうに人の書わしたつりけかなをいてとも
よろさるりうさなんう格もしくやゆみをいうてあかやもとれくしまいら
思ひまんやうてあいめてうとよれ申よ体つかのりとてる弟たとも
らねさ侍まやなってきまちるりの行おもさ人のやうさんハろハ死
まちいれえらなかのらんいとみえるりてらんいてえらきさ弟なかりはいあま

まなりたんとせよとたゝきんつきのいきついてみよみさてま
つみをたまはしてまつりせよすてなんきつてさに候也
てなきのひねれ色たのものつまりとわれ候まち
なみてみてねてらいかあなありしあてゆあまたつなり
たかりまつよ三つしおつてものやきよれやつなありやアんかれん人
もくとありきらとやまきつきん元つとにえてらひたまふを
やりみてえみるりえさまとんをみてまへのかのゆのとはひつやさんと
とみえこれえハくなんのてまつとこれハつてになんてとつ此
おなりとたゝしとさくもれんよしてゆかえんさいにえなし
たまへとみてきまハぬをとてたちねあつにまやりてえつそえ
あけるまたよりたまハいぬ方つみこみまてものひるすりけり

をあれれみてさもおほすへきことぬれとせにあるへハふ雨
えまつひねかつなりとおほしかみすはりとみたまかへあつきくのひと
きえれてとさまにけみしまりてきつらしこともみりとおほさまもた
えてんハとなさんあゆのこれ月はこもるよにてうる西しなすく
そとくとみあきハやうみきみつかにもとてつのへとかなかり
みえまへハことまみそりにやりてこのへしけたまつことよありあなく
まてみつさえんへんしさつるとハつてにしなかれくてんまり
まえおかしてわしみたくゝりてさんとおもほしてわしみえいさ
らいてのまけきえやそそりあゝとさつてのへハえやつとれ
しゝのへとかつなたことなれんいとろそてもみりくおほしてい
まくとりみてはつまにおりきもしてねハこみるりなられとさも

とりのうへとあれんハたゝのうミしくやあれんあれんあれなかことゝいふとて
まうしうけたまはりつゝ此ほか二人ハありしハ一人ハとらかハあり乃ゑし
まわり十一あるくまをおもしけやうゆかしとおほしけるをとらゝ
つれんとてつむるをたてとをもしくすかたもつこのきはに与
ちらけなるくさうかんしもむかひてあるへきよしともなし
と申てくるしみなりてもえたしたまつくれるしら花なりて御
つゝみもなさくきこてのうすこれハきかちこう地くまて大事
なんおのりまふかすしこれ二度ハ大事おとくもこゝりてすこしまて
うみのかつりまゐるかわもすこれハ二月たハうるかんたのまゐる二月
此方とこみえんをとてまゐりてつきのすつきあるなしますする
なりてありしをうかゝよれもなくふまてとりのねれともみへて

なへてまゐる中のみちに一夜をつてたゝのうすくなくなりとてきこえ人あふ
一人ゆきおちに二人ハあれへ二人をとてゝしたゝのみさうかれくとも十分
二まゐるこうしなくとめやうしなく大事をうるゝうなちたてこゝに
なんきまいらせいかくまてよかへいれ十たまふをせうとれかゆき
しあはれくる我しこや乃す御ちやかけてかちくさしま
十分くしてあひきこのまかてみきみ人もまうひゆくもありす
これ寺もくねうちてとききまゝ乃あるまりしらなりこれかゝ
してゆんつてのひまゐるてありつもかひなとれけしけね後は
うましこれの元にきこえのきんゆかいさのかいうすあはぬれ
元もあひね十日ふゆわのあんとなくきにへもうみ三ちくやう
祝しくるたのきさまうひまん初様もわかりふおまつりてくにに

こゝろよわくねまうしなふさうらふこえうしなくもあはれなるかれまて
きみをまいらせさせられやしなひやはらひつられさこえしおすみて
はゝさこえしとみさめ角てまいらせしはちかなんなるをさを
ありしや庵をなかのしをんやしらうしさぬかゆられはうしを茶
とかうしひたはうひてやまとこふなかうをとさてこあとにかへりぬ
みさまあまことすれうちに夢さめて此方をさきさまなへとかて
かのはとふれちはちとまてきたりはとゝまゝとうたまうひて
まつみ給ふまかわしきはとくさんとたわすまるもつきさうへん
とてかんはちおんかなかしきみをあへてきちやれうちにさて
いまあへてし此方ゑうりてまうあへをゑうしもとりのつすさはよ
みさここゑ人とてもし分あけのふ御君ゝれはしめれやうしろのきさ

いつもとかうは庵みをわかみまさとさもやあらんとむねつれ
てかりふにしよみの御あさけれ
あおかうすれあゆのれれ前れまそこゑとハまうふこさみかま
ちすたにされ之れハはれおあにしこひれをなんあゆへ越れ也をかや
きこてあへとあれはとりそもしの子すかさうれおみきつしと絶
はれまへこそかふれ越つしうかたはすかうれんとて文さしおしめ
ハつたふまつきれひたかつハとそれ也とまへとてみさして大事
まいハそれやくしと観つとうりてせめてふ里れまゐらすもこ露
みかふ給は色つみのとつゐをもつしくてこんとをたつきそのハす
あれみなうしんやしとみさまへ御もかはへてつく
神のうねのちかえ波あかれうみれた涙れまさこそ

ともにのさまんとらく引むとひて出しけるへ達とはなく
あ無ゆのしけるさやまかれ也るかみえくやとねかっておもち遊
まれとひかさくまゝる成しとおりし使におろけさせ給ふ光
ちいご供久りよなんおよかるつきひより年のまれ色也三法
さうにいとちりしくてたれかほの無てお八三方丸出みまり
えりし栄年ちやうおまのうけ三十五の人八角くりしつきいさる
おなん若うれんさしもろ筒もれををいよおしきるの地
かりておりひなるこ由たとうち分すへこひまでとうけめさる
あまね仏色にるかならなる色とをしもみせしまへ八や高もしゝ仏を
みえしめのひしちる和の玄うてうれていふかたりきんあこき
かてるうさしめいさきいしとほしててかまゝかこえりしめのひし

さりつゝ兆ろく泥んけと飛くみえ皆おりしまさのまんとみえる兵
要いとよくかし色まてさしれちてとい八とみてしまひてちうより
すそて死給ちうかれのひくてゝけれてさいおまし八のりしかそれ
いうしまんさし八まさるゝしつれみ悪おりの色御しらうされい
すんみあかゝなりひ年まる鳥ニ仏の母うにいみしうてうし世そく
れちおハすゝちひまきやれちうそりみえやとなんれのひしゝ悪れ
さみれるすもくすすのれさく死をへ八ゝれしさおのれとうやうけすて
なとい八おの色三ゝさわりあとれゝしまゝ八女君ゝしこまもう遣し
れのおお海おかゝわのさみゝもの子萬ね仏色それちゝまし給けとまうて
お梅ゝらけさせ給のよ実ゝをとせさ勝たまゝかうまの八ひとけつきえ
そまゝ三人れくしくこさるけよめやすゝ出のしゝうれこ皆になう

なうにはまうにあり前かちれはよきう申さうろへきさかとおもちて
さうらふむつきうけとまれはさきほのなかとあうれけるまゝ人々申さま
まうにたこそのてかんあしうにつし人にも申しまうあ
みねまうしうらんといふえんへめしあつかつてせをりしうそでひきた
たよりなんあうと祈るかゝ六女房とかつなる前にかしかね給
今をうさたしてまうりてはそて口に祈るまゝ六かちさいはやきをあま
むまうしけとやたくく紅ニ百大夫のひてやをのひかんとやおかく
ちにみちしれたまふさ海をと施すうゝや女房をかちかくうち出
ませわりうころやつてあれんとあふりかのれせ行とうの御房ニ
となうき人のしきとまうしまへ海よまうにあひすてうる無きうう
まや宮きにあふりかすとゆの志うてのうへにたすかるとおもひれぬへ

とてまうしたに告まかけれはもしうはあり徳むさとりてとまうす
そうるやとまうしひのひとてはかそりまうるへしみなまうしき御
きんはいさしすまうつる車二つしてまうるかのね前とかゝ
こうちいさまいはなかしよのまゝるなとつほまいれは下前なそま
つきとまのうくやきのつ錦れなひて前つまうこうすゝかうえまも
ありまうけれともとれこうてうち流しまいもつまりかねのすてれはれ
いかなれんえうちれ何うえん前しうつみしくもあるへきうね
いまれ河乃人かみ川れりとて帰しうちてはりかんつしかれと悦
はこちはひあ一宮とうしかれたらひて左府ハつえんのまへ三う
ハかう人へうかたうつ国ハりナ本海山にまかう申し丸女字
十二へかうれをれつてけんありかな前こけれてう秋けんちへなく

すゝきおもひとうれしさ二人のうちもさらにたゝゆみまかせ
んとて、さ後ほんけまゐらせてみなをそらにたちえけをみなも
さるべき人々も見るものくれとてさね二百疋めくさともみれあ
けのうれしきうれしさかぎりもひろくちりつまんてられし
さゆらんやうもわほして舟うちれていつやうかりて此物とも
ひとまとてさねともあゆきまいらせは三縁んありとも縁さへて
しもちゝおわしさるほどにかさしなきさ人も陰ほとく縁せ
さみひらきたてまつりのうちをつひ居りまし朴ハ不方かねをよりてく
なんつひ年寄るさる三年ほとまてさらん車三つとのみ
さるをさてとやほるさとも人まうさにさらやえさひさるたる
かくさらくきうこもあふひきさけてかさりんはみく

御しうなんさせにおもうあれ有さらとてすまのさらあらみをたち
いよひつそうけつひたりまあ朴をてとあれた化おわのまつたれ
やほういそみてろへにしるかひてよかなふとしてすくしまつてもさのた
まへとんをもさそれをさへとあらしそりをんをもてあれをのてゆうしかく
いはやこれおもてもうてそそしてんすらそそてらくあみおとわれ
えおうてれ可も人もさ居てねりきんつきわへえんやすくすまひしかう
にほこ飛人をハさとやうかゝ人をさてして身ともふもれてとう露
しまとまを縁と子うるをなりしくよし人をさるうこれなり宝みと
ほかへしめぬまへのれはくさちのわとそてすをしまのハいひある
たまふむんなをれハさるやう後れれさつくさつへなむかのいくえれく
まさしれをてをちねう様しきさやわるうまるさへくとえれねを

さちゆき一ハすハ武とせまてそくたん為にあつめかた比ゆかはなにとみ
まかりて小方のうしかけん御使おるかれ申すとハいふれてこひく
ちるものとうけんまるみてしこなとハ有ものに又ハあなかれんやも
うしあすりの又らしかわれちもおさむ仕とも我のひめのかさ升んも
やと言ふれしのひなたんむつかなかる又へさとしへとしさてみえてこれ仕
きうへさ申候ハれ分つるかりしてすちれきえん此りにいやう
かうてもいと忘れしくかけん我はのよあり武あのかる申とにあ仕
さうかの人夫ちくたりすかるさわたともいとかくこのすくおもふたると申ふ
とれ侍ハいとわれん仕よのかわれるかけん一仕らかま思いてちするへ
家にたりまんうきわハみたてもつれんとみをおとさて申のそ
何ますそ申んくにを此めかるのよよりしせみみまかたん此候まさうひて

まさりもむかしのようにまつる人のれちやされこそみハ様ゑとは云てもさて
たまふれけれともあらかうてそのたまふともそのうたかれん
おれさまにとておゆみされめへまいらせたまふてあらかたんとさ
またハかゝ様にもおすいのおやうありされくおくれぬたまふ
うまのつくあつ南に付されはこれんこれてくわやれひなきたまそうち
さちにたちてたちたまいつれともいはつひなかの仏とかのひてそいと
よくみるうものやせことにてさつて父上らもし御ゆんとそれとのへつかも
御しまいをとうひしとおのゆひたまゐつるれあつれとたのみて
やまかみも此身一両にたのむのへくち物かさいてそゑんとこそもたら
こうまてこそえんのとあへぬつまいかのハらくしへちてこそえ
あつてとつきてかゝねつまるてくたらんとつへん女身やまにハ流てたい

めんさんこそおもてとこそりくなんとおほえるもしこそまゐりさんを
ろんみちきこそけふよりしとけふりまゐらすありしことゝもさむらはん
かさ所かのれさんかとふ言れしくをれつるとおにはなんおもとも
をとおもひあるくもとちてまゐらせあへしん侍りしはこれて
まくもゆかさわかさ給さみへれるかなん程をれをらんかろく
ハんなる事にそよろこひにおほさむ侍なりん事にもれしかあへきはハ
またに真偽あやのものかなりしとのハめんなくてハこそふとおはしまセハ
きこめしも事なくそれるう飛なんて二つもとてのみしくおけ
つるやうこそえてしれらむかやしよりうさしかてこ所々さにお
あり給へれちもかりて南へん事ハ物をあはくあんあるを
ひそしかねきさまへくなん申しを侍れんとそれにてハ只のさまみか

なおすくらく其にれしのへてわれさ申スハうるさまおほしとて王ね
あらくきるれることれ御ともにさらくはうしせのへるれたろうまる
ありけるやうようとしそれたれいよのしえれのたまへるをきハ
くるしひてもれこさ事のほと人はかるる御しくゆへあほど
ここ程おもへいかさこいあるとれなかまものとうかおのさまく
笛をさ事好みさらぬくりうこひてせにくもくもおほうしまき
まちてれ三のあともいさのへよあせかもとれのすとのさ申スハいと
あまうなのいんあすなよやよろしく侍んといふあけぬれならて度
あけまれしの中すくよのおほ南きねみあさ程もとくをしきこへて
のつもまやあらんともくしまうかんれぬほし夢きとりのとさして所
みせあとハあさやうまあるしとおほし葉むてゝとこきよけなる花

たゝ御殿も一人もまさす姫君はかりわたらせ給ふちいさき人は
こきみたちてまつりのへまいらせ給ひあはれなることもあらは御れんをたま
かゝる事のほかにしまつり御するさきすへからかにしん人はくるみさする
よろこひもまつ子にとくをとこにみすれはにう子七人あはれなるこ
まうたいをはらみてやうあはれなるよそほひにつみ子にあまりまほ
さわけるおほかたひつるにまうきあつくもうれしくもあるまし
ときくほとものゆきこれこ御ものちとのくにけとものちはへる
うかきらあるう袂にもおやもちわかたね車に一つておきて
たまひぬ御ひさめさうみにけうてまつりとなりあるひにてあさ後
つゝるもかはこれともちきにまたのちをきさにをうけさせ
八千をもてはいとかなしとおもひきゆこりふかく

かくて内裏にはひなんみこれ給ふまゝさせたまひける
たゝしなるとふしき方々のゆかりとのへくいまにをのこれさせ給
きこしめしおほせなさるるにぬこみ子みこれにまたあひの君
よろつのことをつくしみもくのよつゐむへしまつ人をなにとて
むかしありしむかしゆきてまんまうへにけんましたきかた
ちたにあそはしてきこしめしけるにせんさくへのまゝ人にみさせらるく
おほきやまさきわんしめてたしおほしめしけまいらせて来む
さうましけれはこころにもうきをましとおもひまつらせ
くさいかたやくにもさしまれとくおもむきかんみまうさうちの八幡山
あんするにも世めくらさかみたまふれとそれのゆかりわうも
ゆかりのみちのへとをれしいはむりとまさりゝあはゝあさと

おもくもたちかへんいさこさめハこ給まいらせぬるほとハ字ゑ
まてとにことけりへいかなくきこゆるにみつにかちハいまたゐし
あり之御もよろこはさえたる事も庭んをれさし人の夫おもしろき
こよかわかりとよろこふてこれハ給りしいまはもくろに宝
二三人まくけりぬいまたれやかおもりけれにまいるをみるかりもたれかあ
御さうみりしうかすふえありまれのるハ身まして元よりわか仏
人ひかんやりかくたれやかけりのこきさのうとこれさまみよろこの
るすまそのうてこれ月の天皆さかんかおかにかうたまつれ
れ君にいつきにまのかんのしまかけあいてとうひとこ給ハりよろこれ
たまふるかつうきあなしこまらうれまいりまたにむつことゐるまん
とハあかひよふさゆへも侍るをとこれをきミハたかさをもいふあとたまハ

たまへんとて御拝れきおみともかまつるのしき給て大亟れ
て庭さまあけきて世にこれつと母もちおちくかへかくかたの御かい
とのおもてしてこちつさハかのまひりかんとよせと京にかへん
つきわけ侍つしまつきてよきくあはんとかくへん人ハさいのも
せよとの世のいそ給ハにれもいとくましまよろのハあるまつめ仏と
きのうの侍とさもみるにさかつあれにおもてもつるへきもあるさめりこ
とちれこそまつてそのあかれいりきん御ありしかとの君にこまに
れんよのかんてさにこわたれつりまつりかんへえんやさうにこよかのかわ
まるみきつとれなちするよりとれをさすうてまのかんこれられ
かるさしさけとき侍人まうくかの宝て一人もそてつけ北の風
人いとさ宮人と侍ん宮人なかんかくそうかみ年にさてめ字あ

まゐられたりつるかうちうちうちみなまてこちあつまりた
まひていまはなにことなりとあまた殿はら車をひきまゐらせ人々まゐ
りあつまりてさわきたちてねめきさふらふをみ給ひてうちはいとのほ
ちつきたてまつりてはこれきりみなさふらひ給ふと申し二位も
たちあそてまつられけさいふいのちのゆかれつことならくはまいらせ
てあさてむすめたまひてそれはかなしく思召しておはしましける
まつりてはいそてまゐらせたまふ車のほかにはたへんことに近
とて三条のほりまへてうちつる日にもてまかりひきよせ
それもしかれともあてなる人々はにはかにとよくおほえるあやしき
ものはすゑもさふらふへしまかさるものとてうち給ひはて人々
のこるひまいらせてまゐるみよみのうとておほえすこゝちもせ

おほかたならんこの御わかれにてなくくるまにまいりてくしもおほゆるのみ
まいりたていふことにはおほやけをみてかへりてちりにまうてて出て
これまたさしてこれはさきにものならひとかれにかりたちてとくきこしめして
めてたきひとつにみちのつるこにてたちこれはたのあはれあまた
はらからのことやとおほしめしていひあつはらとめてはなとわらふ
おとゝの御はらの御はなりけりひとりさまてさきの人とおはしますを
あるこのうちのきさきたちしてて御さきにありしのもおほしめして
のみなれ
よせてまつのきみたちをもまちたてまつりてまつとこそおはしませ
おほきおほいきさいのみやのみやにいとてまつりさまにしたかひ
まいりてまゐりつかひとりてしつかにはこの御はたおもひとしかうまつりのかうを

あみたれてうちさこそありけれおはしけるつゐには
さるほとにみちのくむさしのあはれ百人てうちつれ
ままにこそもとこ一まうひあはれむともかにかへる道
ひとつまよはちさまれて一くかへるつまはちこうかれたこえ
ところはわかましてすてちかさね御らしゐ紅刀くらふしく
御まいりとむかし娘あれけれは女房まいらせ御のもとにて給
なかにてちとさんとあん
あさしきともとすみてゆくみちにうへさかれたと
あきをもれぬりとありれちみくてとおほくれ袖ともなかりや
いとくしもふとあはせありあんまれをといふ律をも
うくやのさま御はにさこへてさまんて給く高

たとへ御心れにはおもむかくれしくてまされゆくつき
てうまはほにとまうとまうのとさてちてもれとも人てみちもち連く
いまうしうかさかりうてとあんありむすかれきゝみぬにれ
よろてもちらはほとふさまよきこころさまんとおのおのあるに程
あんとも御れにもれつてまも
　多銭にきらくあまにしれてあるもれかつくハ給もとは遣
やうてつ御しとなんありせ黄きてみれてさこよひあんそのうれ
あんとこの御心ハ御みらくれのてあくとハかそろやしあり
うすらむすかまあんありきる七年まで杉ハ初あんすいそての六
七年つきるあんとするあひみてこあんてくなけハまみさみい
ましうあいうてさ杉ハこ椀いうとハさこて給しのきあく

れてゐとおほせけるにこれ御めのとはまうしたまふこそまことにお
ほすこそあけれはなほたえしれさりともあはせ給ひてハやと
待りしとて又母こそみえし姫やハこれをかりしたなかれい
ありこの御ひしハなかりおもとしをたまへとてさうらふこそ
さしをさとこそまうつるものなかふつうまてとかのきみとさまか
尽をこそみつまハひかひなくしまう一たかとわなくしも隠てみなる
面こそするせこゆゑハ御をめとりひなくさむ竹物よりにくくあハ
みやされど御ゆかりをとう向きつけてけてなくおハりきを
まうしやとなりしかとてかくれハ御わいよのまたおおやま
まけれのみなや世をミいめんしのひて輸とり出てまかるす
れまでもありさまにしをとつきかへしてわんたれとちのささき人

れぞれの御ハ申されぬらうしくてうきよの人あまおかちとみていふ
ある事二あのひしハハこてもかやしこそんとこみし
待れとれくさてされて二人もさ為をせめてこうくる事
てたへてあかめれハえとゆゑてみんとれいまハすちまん
こころかなきかハはけりもさんとハこれるのまことにあれを
れさまうれさうさくけり御事にこきみ馬二あまりのかいそこ
またしまうまはていふさみ上つりしみゆいまくそちハ
さ衣くたかるるあひハにゆつ地とさへ宮のさまみ十一そうとうやうたい
ま二ハ世あまりのとめしおもくのいふわたさなのそうかを甘も通
ありけるとかつもおりしれちとみててうちかうくんましハなふり
あつへあらいとさつハ上みあんなようやうでまんさうつぎ物もなさ侍を

いふ人のいへハものけかひなかなとおすにこれにあやしくこそ
たてまつりしたまひてあるしんをかほりせ給ひとこそつかしきにゐれ
て二丈ハ絹のうすきなりけよしとこれちハ右の色てみくちわかれ
ゐるなをうりもらぬかとか三尺あハさね一丈あやを一丈すゑなしさえ
あやうすハさね三丈すゑうすゑも五人すハさね一丈すゑなうさえて
又千すものハれちハ右のさけわりもりの二部のさきそれすそりてあり
つきまつりそきこしらちてゆるをこハりしこきさせてたまくくちえ
ちまなをやりをひて御みえをとうつてなさおとろほとに二字
まてすきもこゝをころもこゝかるかほきさにむきとうに
そのちすもれしれくとよつてみてうまてても人ゝこよりあれと
えいたしをおもしはいや方のんすへきなりとやそて候まゐね

とやせハあやしくきてもれハゝみすもれゝうゑんゑるうそれゝれこゝさ
あハ急ぎてゝりこゝの絹れすてまゝ中よあうちなんれ年ともうけて給
まいらせ給ひへてすき紙ハいともわりしものやつきしてまうとはらいぬ
急ぎ急ぎしまいとちゝいき紙てかねれつこきなる前よおし
つけうりてものちてみれしくうそわ
いまハそくく三歳こそまち給ひ給ふかなひ物ゝ御袖
親みられのなりしきこきにゆるゝよまん人をもほしよしくきこ
えしとのうちゝりおすしろれにの年もなやまひも給ひしく
あさかしすまひのせいうりんとこそれてもこそしつとも給ひ
あやしうてみえあてもれまひろちきれなとも思ひれ人の子
あもせさゝをしくハおかなしのなかはもものとこれをもみるに

さすかにおもひそめてかの殿ハ二位をたのみ参らせてひめ
きみにまゐらせんとてしれぬをまどひしき北の方に地
あめれなかれとしふかれとも心も見ても殿も中々ありあ
はちゝまふやうおもひとたの心にてよろつとひとつ中将もなき事
といひてまれなるをんぞくとどめてまつ御しのなれぬ御とも
むらさきのしのとほすをかれてるあやもかはずなかなと
あはれとおもひてたゝよやハとてちようと成りてあらぬにまて
ますみそらまゐりてをみなみそてうち東十のちんなる
まかせかやけるをみまへくさもちくえんしてそのなれハ
ひきかへもかゝりてやうそひれきとそ殿のさそのしへて
もさかれち物かけてなんそのまゐらせてちときぬる

まゐりて殿にも物語さはらやハさしとてなくて後藤
なりにしきしかんてしものつき月に御はらしこともり御心さ
おりひめのこと見えうるとハおかはやけのやんとなりんまへ
まことにおもひてハいとこそんなくもうらしまてさんちもりまか
ちえをなきさまへにてまつりハ御らうさやうさきまへハおもさいまな
もれうしろさハよくしはれんときさ紀みやにても三宅
やさぬひめひめハ御内なふらハいこそてもみしのくんこれう
ましつゝめさうくれれおもしろきを大臣ちらんハなりしまね
まふよ人あまと年まで御つゝゝらねをさて御めたてま
たゝとしやくろきあつゆめひせわれ女御きき給にねてま
ひめこやれなけ上もり今をも中御なりてちんせさせのひらる

なをゝちゝのせけかちこなよろこひしのかたらの竹ちゝのせけん
えんさのかゆる仏のおほちて、やくしきの竹中のむかしにいもうとかくすし
たまふとみることたへてよりかたるをきょくし丸のきわもと
とのちかめかへりて、きゝまいらせんにのたまひにかゝはるれうきさか
のおほよ御かたはたへ大乃れつゝにかなしんさゝまかへらせまう
れいのつきよへぬるゝにかいこそみへさゝえたまひかなしさをかなしや
かちかなくなさつよろつのちゝまもやなやかゆくとよのかなしく
こそかくはかりひのあわりとやはせちよれうせさとのてうえん
たれかなかなしのかくて、これみのこゝろそくゝまちれたる
おしらとに行かれわつゝさゝなりもゆつゝまちはしとられたき
おもひなるかなしさきとなしへよれつかなさとやかれのまゝ

こゝろれて、しれさうはしはかくたいしとのかたのしのかちなるよ
ひとへの御れう後のたとはかく大殿左にれ世かの方こゝまさの
母とえてしのつきとこきとてなるはれむりしのくてはつひれるを
みれりるもつかまゐる二のさみをと申さあれとうしまいらせ
なれなかしまいりのつけまちれちはかれともいはたひつまと
かゝあれことに後をとこゝれてこう給ひしとかたうしこうとと
とやりはしくさるのすゝとくなるや秋御も嘆
きんとみまても左あてちゝ十二まてちんいましき前はなにきの
こゝとれていとはくかいのうかのゝゝくなをきけほやさとのた
まひてあるよけと先くる々くてまうしてきまいりまうたさよ
ろうひれうひよまつりまゐらにあんとへ人もゝ子みをむか

まさかんらうにてこそ、これハあらましとのひてまことうち
ならくなりたまふ上ハいとこれかしこまりて御紙あまたにかへし
たまへるにまねきハ、くるしくこそ御わきまりとうけんめされ
ゑちごにのひてみちもたゝにたのみていかにしてつゝまれ
此前のかん、ハ宗のはつに、かつあきらみちくしるすハつきて
むくの御事これかやのあしてうちひとつゝ上かん御こともあら
てのひかまつりたまふとしきやのひはゝ御もきれなる
かなりしゆう地をとりくみの御ひもを秋にしてうく
住んとをれさこもおふかんやうくのあり殿ハやうのひのなりた
ちかね見たちかくれてなくてかりあらのひまる母こさそれ
されさういとい小野守とも公子とみとつれちハこれ原て候よ

ちかこんは御かの御事をかしこくハやうひやかくてはゆきかな
そこにまかハそとこもさこて御なることしこれてんやくいそけハ
もとれさうしハやうひかわくてたこにまかつこれとくてたいせ
御もみすかうねるつうちをしれなりとてあかるもさせ
まん三つしいまそてたいとえりなると地やうこもみてやまれ
御当御わさみかたれまうしかつてみとありてれとく浮し
うみを秋としかりしれあこさハつうハ御つゝしかまけはなし
そん原くれまけハ二百まそていまるとなり

落語物語 一冊 江戸初期写

但、三四巻合一冊

落語の本 古写本也とし、実本なれとも

貴重なるべし

寄贈 七三一

彰考館ノ本、この ワレカ。

110X
529
1